觀善餘論

019397-000-1

81-796

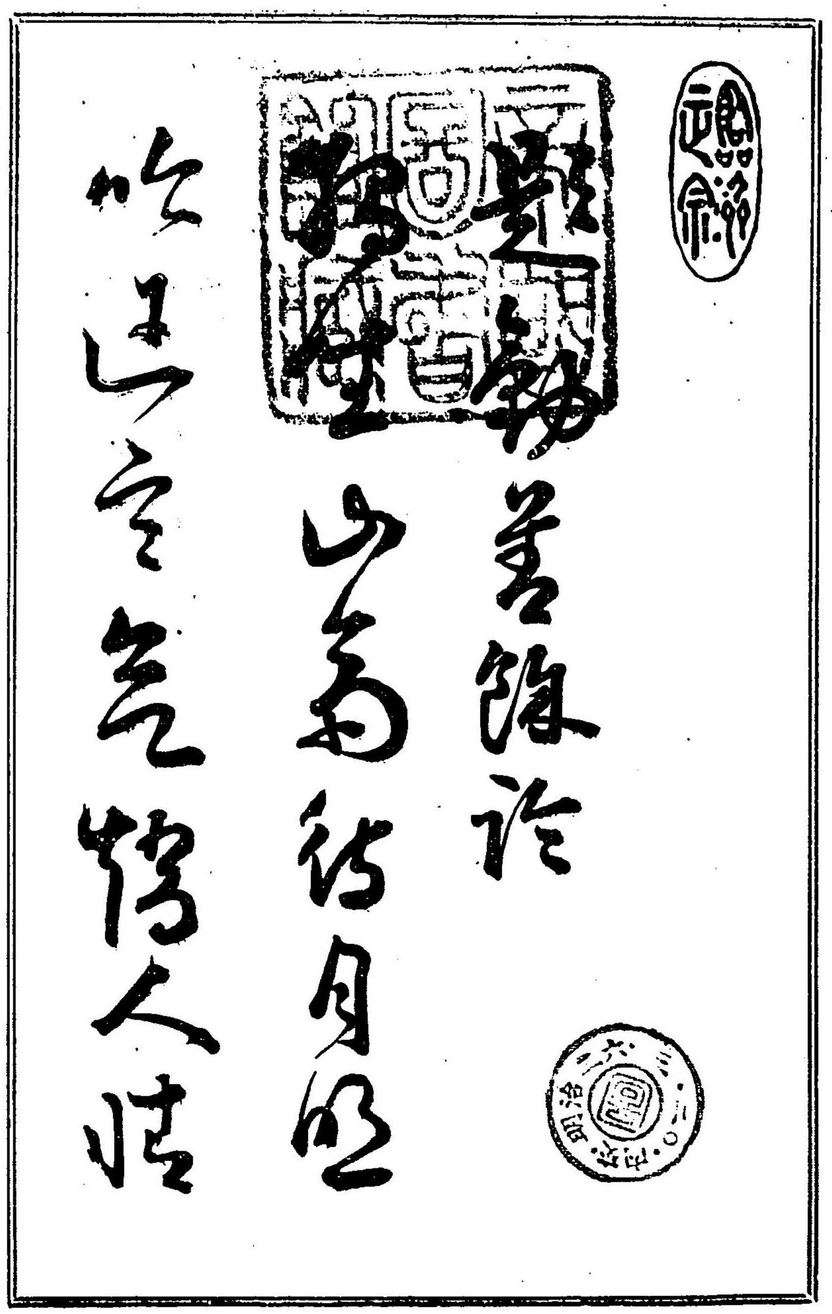
勸善余論

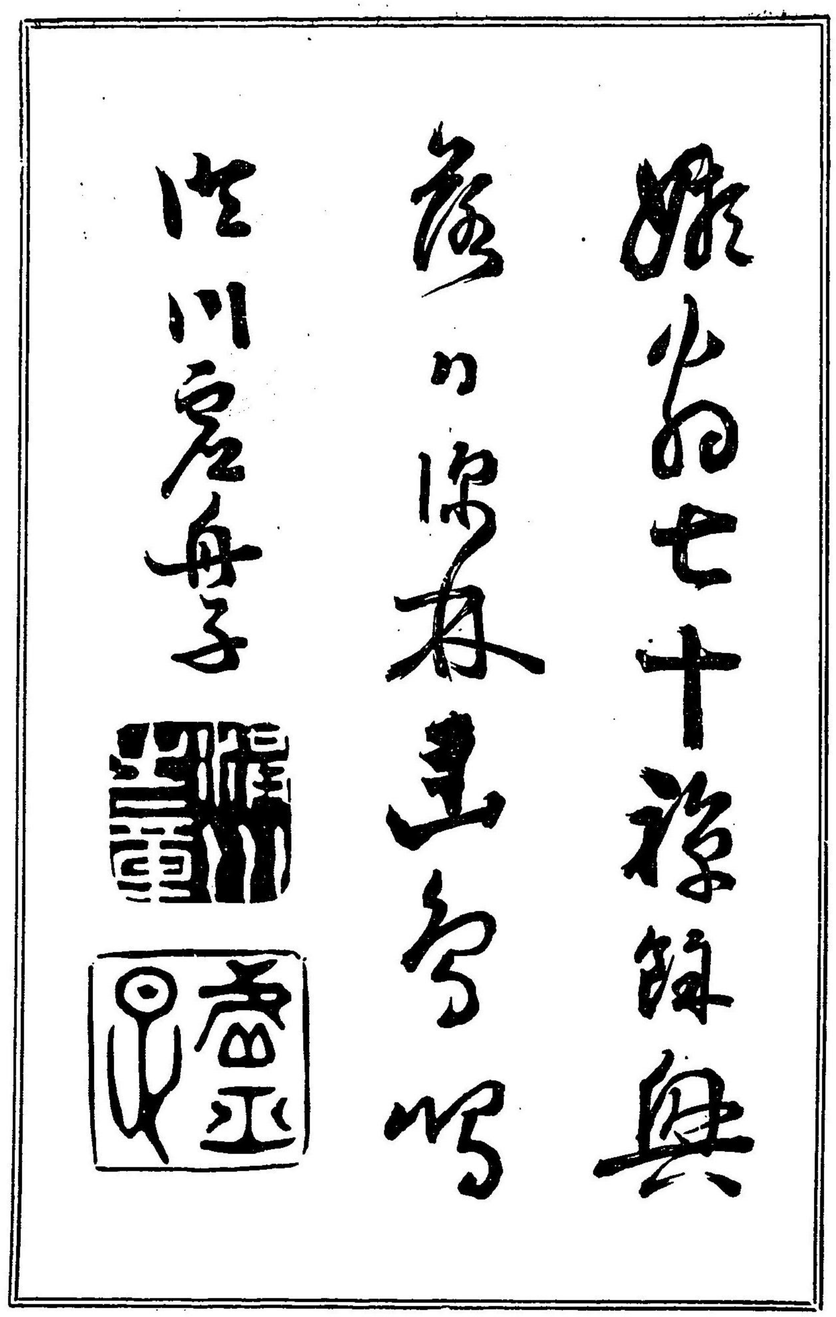
川尻 宝岑／編

M36. 3

ABG-0098

81-796





勸善餘論序

有人來道。我能信吾佛法。而此人未必會佛法。又曰我能會吾佛法。而未必能行佛法。嗚呼行也。百千法門無量妙義。若闕得箇行字。則悉皆成戲論也。昔白居易謁鳥窠禪師。問曰禪師住處甚危險。師曰大守危險尤甚白曰弟子位鎮江山。何險之有。師曰薪火相交識性不停。得非險乎。又問如何是佛法大意師曰諸惡莫作衆善奉行。白曰三歲孩兒。也解恁麼道。師曰三歲孩兒雖道得。八十老人行不得。先

師蒼龍老漢。晩年撰此一編。名勸善餘論。以指示初學入道之要津。蓋取意於此一則也歟。其言平易。而其旨幽深。大警策時流之輕躁矣。今爰明治癸卯春三月。丁先師十三回忌預修之嚴辰。先鳴居士川尻寶岑翁。與予相謀。再刊此編。廣頒同好緇素。可謂報恩有分矣。乃書一言於卷端

明治三十六年癸卯三月　　嗣法小師洪嶽宗演謹識

序

佛の道廣く且大にして人常に其岐路に迷ひ禪の海深く又遠くして人往々其風波に艱む況てや吾人已往の時に於て作りおきたる幾萬鈞の業障を荷ひ五濁の怒濤漫々として天涯に滔こる此現世に游泳する者の如き我慢の險嶽峨々として到處に峙ち愛欲の毒霧糢糊として四方を圍み以て嗔恚の渦中に喰喁浮沈す いかんぞ寶所の途を得て珠砂瓊林中に巍然たる黄金樓閣の樂土を望むべけんや こゝに先師の遺著中勸善餘論と題せるものあり 道俗男女に通して普く斯道の要旨を得しめんか爲に著されたるものなれば平易なる假名文に依られ讀易くして解し易く しかも其言簡明にして眞に徹り俗に通ず 故に一たび之を繙けば謂ゆる我慢愛欲の障蔽の如きは自然に消燼し 知らず覺

えず岐路と風波との地を脱離して、庶幾くは遙に寶所の坦途を天の一方に仰ぐを得む。是豈闇夜の炬火、霧中の指南車と稱せざるべけんや。今歳先師十三回御忌の法會を營むに當り、師兄洪嶽師と圖り、復ひ之を梓に上して廣く同志に頒ち、一は以て彼處に至るの栞とし、一は以て先師が慈恩の萬一に報はんことを希ふになむ

明治癸卯春三月

川尻寶岑誌

勸善餘論卷之上

湘江　虚舟子　著

至近にして見るべからざる者は眉目なり至親にして知るべからざる者は心性なり眉目は見るべからずと雖ども鏡に臨むときは則ち之を見る心性は固に知るべからざれとも徹悟せは則知之苟も徹悟に依らずして而して心性の蘊奥を知らんと欲するは是猶鏡を離れて眉目を見んと欲するか如し嗚呼難い哉吾見性の學如今人文開明人知高尚の時節に當つて吾見性の一學最も必要なるを覺ゆ或る思想家の説に文明の極度は智慧德義を優進せしめて自國の獨立に在りと論すれとも説は誠に美にして其實は智德を優進增上せしむる所以の術を知らざるを奈何せん余意ふに見性學を除いて人文の智光德權を優進せしむ

る學術あるを知らざる也熟ら世間の人情風俗を大觀するに智惠の進歩と云ふは獨り器械上の機伎精巧に在て唯世智のみ也人文は次第に經薄浮華に流れ性智は却て邪智狡猾に進むより外ならず茲に於てか諸縣囚獄增殖して全國陸海軍人の員數より超過せり實に驚き入たる人情風俗の腐敗なり此有樣を以て考ふれは智慧德義の優進自國獨立の好時節は幾千萬年の後にあるも知り易からず近頃余か郡内に有志者ありて勸善會社を設立して人精を矯正せんと欲し山房に來りて余に其會長を囑す余不敏固辞すれども可かす遂に勸善兩字の美なるに對して拒絶すると能わす竟に之を諾す余は元來見性を主持す然れども右に陳述する如く此事固に難し併し淺きより深きに至り卑きより高きに登るの古例を攀ちて這回第二第三に降つて先つ

勸善の一着より始む漸次高等開明の正路に誘ひ赴かんとす諸君之を諒せよ

偖公衆の爲めに勸善の端緒を抽き演べんと欲するに寔に材具多々あり譬へは群玉の府に入て心に稱ひ意に滿ずと云ふを無きか如し然れとも勸善の學集めて大成する者は佛教に在るとは則天下の公論なれは是より先つ吾牟尼法王庫内の御物を陳列して會員及聽衆諸氏の瀏覽に備へんと欲す

夫牟尼大聖人億刼に諸苦を受盡して德本を植へ三明六通を具し三世を洞觀し始めて成就し玉ふ處の無上正眞の妙道は世俗暗短膚淺の凡見を以て議すべき者に非す井底に坐して天を小なりとするは天の小なるに非す己か居る所の小なる也鱗を見て不祥と云鱗の咎に非す己か見る處の博からさるなり蜉蝣は

天虫なり若し彼に周歳七十二候あるを語らば虚偽妄誕とするを必せり皆己か分量の及はさればなり故に古來大達曠量の人傑は佛道を破斥せず能く破すべからざるの深理あるを知ればなり毀佛排釋の人柄を古昔に求むるに魏の崔浩は酷虐讒佞の奸吏唐の博奕は姦婬亂行の惰儒韓愈は愎訐固必の僻儒宋の歐陽修は文章高慢の藝儒是等の輩は大道は夢にも知らす只自家の嗜好する處に僻し只管名を好み我見を逞ふせんと欲するの陋見鄙識より佛道を仇視せり然ればとて佛書も熟讀せず法理も研覈せすして只佛家に施設せる名目事業の皮相に眩惑して盲者打に破斥するもの也世の諺に謂ふ食わす嫌ひと謂へる者なり實に後世達人の笑具となる隣愍すべきことなり程顥は一旦毀斥すれども華嚴論を讀んで省發し大に前言を悔ひ以

來釋子に對し釋書を見るときは必す端坐整肅すと云ふ朱熹は禪門の開示に由て一旦の省處は有れど小見に坐在せし故やゝもすれは反噬の語を出せり是等は不人柄の至り也古人評して德の賊と云へり併し又或る時は佛の四諦十二因緣生の論極めて精妙吾か孔子の及はさる處と歎美す畢竟は口耳苟且の虚學淺見實に其深理に徹底せさるを知る晩年に及んで目を病み書を廢し靜坐して客氣勝心の見泯し深く前言を悔謝すと云ふ然れば格別咎むべきに非す偖又世間今時學才ある人を見るに佛理の微妙曠大をるとは目も届かされは大底間然せざれとも因果應報三界輪回福田利益等のことを理會せす唯世相現成底に固執して己が虚淺の胸量に適はされば概して虚設妄構とする者多し是等は淺はかなることゝも也就中宋儒性理の學士等各力

を盡して已見を立てり定めて奇特なる說も有らん歟と搜索するに程は人の死する其氣遂に盡無して本源の理に復歸すと云ひ張は物潰へて原に反ると云朱は氣散し泯然無跡乃至火煙騰上して散すると有るか如き而已と云々是等の言一と度ひ出でゝより性理宋學の編儒その言葉を受て語類を集めて囂々たり一犬虛に吠ゆれば千猛實と唯む喩への通り誠に聞見に堪へ難たきことも也儒士の說の如く人の死する神魂滅無して泯然無跡と云はゝ善を成して善の報なく惡を成して惡の報なし自然に生し自然に滅す譬へは燈燭を吹滅せし如くと思ふならん是を邪魔外道の斷見と云ふ別して吾　皇國は神靈を崇敬して祭祀の禮式嚴重なり若し渠等か說に從はゝ天七地五八百萬位の神靈も皆虛假の空飾と成る周公郊祀后稷宗祀文王明堂等の經

典も恐くは無用の妄言とならんされは書經の金縢に周公大王王季文王の神靈に武王の疾を祈ることを出す又禮記に延陵の季子基を繞うて生ける人に告ぐるか如くす孔子聞て禮に合ふと云ふ是等の聖跡をも考へすして麁惱なる說を唱ふ耻かましきこと也其外易經左傳漢書等に段々證跡はあれとも云に不及畢竟は渠等佛の因果應報善惡業感三世輪回の理を破滅攘斥せん私情の惡見より斯の如きの妄說を唱ふならん因つて余今公正平易の說を以て近く辨せん辞近ふして旨遠き者は善言也と孟軻氏も謂へり別に向上の玄理に馳すること勿れ又六つか敷學解の義理を逞ふすること莫れ只但人々平心にして正理のある處を篤と自分に自得せよ今日は明治十九年八月一日なり眼前に顯現すれは是現在の境也昨日は明治十九年七月卅一日にあらすや

既に過去て眼前に顯現せされは是れ幽冥に屬す明日は明治十九年八月二日ならん是未た眼前に來らされは亦幽冥に屬す今日は昨日の未來明日の過去なり明日は今日の未來明後日の過去なり然らは過現未の三世歷々分明ならすや如是移り替る内念々生死分段生死大小の差別はあれとも理趣は毫釐も相違なからん三時三日三月三年三十年乃至千萬年に至る迄其理此くの如し其前後中際の内に於て昨日の懶惰は今日の失敗と成り今日の勤勞は明日の安逸と作るを大凡幽と明とに涉つて因果應報の差迭なき順現順次の遲速ある精細縝密に入て其條理を濫さゝるを明かにして曦日の如し寔に貴ふへし寔に樂むへし若此業感果應三世幽明に涉らすして一世に論するときは比干の心を剖る丶伯牛の惡疾ある盜跖の富壽なる伯夷の餓死する

等天理甚はた密合せす又今日公禁官制を犯せは忽ち拘引せられて獄屋に繫かれ忠孝の陰德見はれし人は官聽に召れて褒賞を賜はる又心行き善き人は一家親類是を愛敬するのみならす鄕黨朋友も亦之を親愛す心行き惡しき人は宗族親眷之を厭ふのみならす僕隷雇夫と雖も之を惡む陽界すら此の如し況んや鬼神充滿せる冥界をや惡を殛し善を相るの速なるを正に踵を回らさゝるべし是地獄天堂惡趣輪回は己か心行の所現なることを知るべし決して妄誕荒唐となすべからず又福田利益と云こと是は佛大聖人迷海沈沒の衆生を憐んで幾度か身命を擲ち一大乘誠實微妙の大道を發明して天神地祇鬼神萬類と混同一體なる深理を說き述玉ふ故に佛說の妙理を聞て梵天帝釋天神地祇天龍八部四大天王諸眷屬の善神に至る迄能く深く交感し

て難遭の想をなし歡喜奉行し護持擁衛して不思議の功勳を現わす是を佛法の利益と云佛に於ては聊も福を乞ひ益を求むる心あるに非ず只佛説に未曾有の妙法難思議の深理あるを以て感格する利益也決して虚偽と云べからず彼怪力亂神の奇異を顯す類とは天地懸隔也先づ如是近きを取て辨じて見れば前後三際業道牽引生死輪回福田利益の理確乎として誣ゆべからず假令禍淺僻執俗學暗昧の者虚誕也妄設也として生涯を盡して毀斥すとも至道と妙理と事實と掩ふべからざるを如何かせん儒教の如きは仁義禮樂治世安民盡さゞる處なしと雖ども吾佛無上の妙道より見るときは唯是人天教の分齊にして當來解脱の方法に非れば實に小乘半字教にも不及べし吾門眞正高尚の大道修行底の上士は佛見にも著すること莫れ法見にも執す

ること莫れ又世法の俗情にも執著すること莫れ只但正理のある處を篤と明白に了會して因果の實理を撥無せず又斷常の二見を生して外道の魔類に墮すること勿れ世尊言く一念の妄見一とたび人身を失するときは萬刼にも復らずと可懼可愼這回吾か勸善會社諸氏の懇望に依て演法の餘暇に業感輪回の妙理を辨せんと欲れども才短く舌澁つて纖悉すること能はず爰に於いて一夜孤燈を挑けて心に浮び來ることもそこはかとなく書綴りたれば數十紙になんとす唯肝要は一般の公衆に對しては吾か新會社の勸善正理の演法を聽聞せられ正しき佛大聖人の道を蹈しめて信心愈々堅固に人情眞實に德義を優進させ目今人文開明の好時節に向はれんことを企望す又吾か門見性高尚緇素學士に對しては世の開明に從ひ此時千載一遇各々自

性圓滿の眞理を研究淬勵するの秋也愈々見道の眼を練磨して世俗の僻見惡風に墜ちいらさらんことを切望するのみ宋の張天覺曰く余れ高甲の第を忝ふし仕へて聖朝の宰相に至る其れ世俗の名利に於て何んぞあき足らざることあらんや然るに拳々として念を佛道に繫ぐものは其無窮の樂しみに自得することあるか爲なり重ねて念ふ人生幻化啻に浮泡の起滅するのみに非ず此五蘊完全の時に於て妙道を聞かざること惜まざるべけんや若世間更に妙道あつて以て吾自ら肯かふの心を印證して眞如涅槃に過ぐべき者あらば我豈此を捨てゝ彼に趨くことを能はさらんや貧を惡くみ富を欲し死を畏れ生を欣ひ及び飲食男女田園貨殖等の鎖事は人皆之を知る君子は貴ばざるなり貴ぶ所は無上の妙道なりと吾勸善會社の諸氏よ希くはこの語を

以て聽法の眼と成さは其れ違わざるに庶幾からん歟

右に聊か幽冥の理を擧揚すれども未だ余が意を勦絶するに到らず更に一歩を進めて擧示せん凡そ天下古今の事物に於て冥あり顯あり幽あり明あり視聽の外を冥幽とし見聞に接する處を顯明とす其視聽の外なるものは是れ幽是れ冥なるのみにして無とは云ふべからず世人唯眼前見るべきの顯明なるは有として疑はず現に不可見の物の幽冥なるを無とし其之を說くものを謂て虛也誕也と云是物の無には非ず汝が愚なるのみ說の虛誕には非ず汝が蒙なるのみ現見せざるもの一に非す近而不見あり遠而不見あり隔礙而不見あり扨近而不見とは眼睫毛の如き是也自から吾が睫毛を見さるが故に他人の眼と異て吾眼に睫毛なしと云べけんや遠而不見とは高山に登て遠境を望め

は空濛杳冥一物の可見なし曠海に航して遠空を眺れは水天一碧蒼茫千里亦物の可瞻なし遠境迥處豈に林樹村舍等の物無しと謂はんや唯目力の不及のみ隔碍して不見とは此に横竪あり横の隔礙とは壁障の内を見て其外を見るべからす又山岳烟霧等何れも横に隔碍されて其外を不可見見すと雖とも壁外物なしと謂はんや竪の隔碍とは昨日と今日と一日竪に隔てあり今日と明日と又一夜隔つ若見すと云はゝ明日は無しとすべきや是幽是冥にして視聽に接せさるのみ其視聽の外を說く豈虛誕なりと云べけんや生死相隔てゝ幽明別なれとも神識一貫して滅せす三世に相續して昇沈無窮なり見るべきの顯明と見るべからさるの幽冥との理ほゝ此の如し此冥顯の中に必す感應の理あり之を只明と顯との處に於て說くは易の繫辭傳の屈伸の

理なり幽と明とに感應を論するは佛教の十二因緣なり所謂屈伸とは佛說の業報なりこの理を廣くするときは天下萬世に亘て違ふべからさるものなり然るに易の屈伸は只明處に於て論す只明處に於て一世に之を論するときは義理密合せす感應齟齬するとあり是れ儒の儒たる所以なり此の如くの過去現在未來の三際に於て幽と明とに感應の理を盡すものは佛教の十二緣起なり試に左に擧揚す看よ

抑無始より以來生死海に流轉し此の心身を相續して永く解脫に至らしめさるものはそもそも何者か能く之を繫縛し何者か能く之を相續せしむ曰く唯無明行等の次第に輪環緣起し過去世より轉して未來世に至らしむるあるのみ然るに此の緣起の法理を辨せさるものは或は謂へらく生死は唯造化神の主宰す

るありて時に之を生せしめ時に之れを死せしめ總へて主神の進退審判するに任すと或は謂らく人畜は常に人畜にして人死せば又人となり畜死せは又畜となると或は謂らく生化する寔に偶然にして唯父母所生の依賴あるのみ若し死化するときは身躰分散して又殘るものなしと或は謂らく常住不變の靈魂ありて之を碎くも滅するを無く之を切れども死するをなく此靈魂或は樂しみ或は苦しみ生死に流轉し涅槃に至る共に是靈魂の進退なりと皆是十二緣起の法門を知らさるの致す所也吾か門に投入して苟も佛の妙教を篤信する諸氏は此の十二緣起支の妙理を明らかにするを以て須らく最要となすへきなり

十二緣起支とは十二は數也緣起とは体性の起るへき緣を待ちて初めて起る故に名つくるなり一切衆生過去の業煩惱か緣と

成て現在の果か起ると云ふにて緣起と名つけたるもの支は支分ちて乃ち分るゝ心なり譬へは一本の木より枝の分るゝか如く緣起について十二の支分かあると云心なり

一、無明とは宿惑の位を指て名つくる者にして即ち過去世に煩惱を起せし時のことなり此位の五蘊か現在異熟果に至るものを指して無明とは名くるなり偖何故に此過去の煩惱を起せし位の五蘊をは無明と名くるそなれは此五蘊は無明と俱時に起り其無明の力最も勝れ其無明の力に依りて後念の諸蘊現行すれは之を無明支と名く乃ち無明は前世の一切の煩惱のとなれとも其煩惱獨起らす必す無明に從て起り其無明最も力あれは其前世の諸惑遂に特り無明の名を得たるものなり

二、行とは宿世の中に於て諸々の業を起せし位の五蘊をは行

と名けたるもの也行は即ち業のことにして何故に業のことを行と名くる乎なれは行とは造作の義にして彼の前世の中に於て爲せし福業非福業の諸々の業よく現在の五果を造作せしむ其造作の力甚た勝るゝを以て之れを行と名けたるもの此過去の無明と行との二つは即ち現在の識名色等の因縁なるものなり

三に識とは正しく母胎等に結生するときの一刹那の位を指す偖て母の胎内に托生するときにもせよ或は濕生にもせよ化生にもせよ(卵生は胎生に同じ)結生の一刹那の五蘊は識最も勝れたれは之を識支と名けたり蓋し此識とは唯意識のこと也受生の位には前五識即ち眼耳鼻舌身の五識の生縁は猶未た具せさる位なれは其前五識の起るべき様なし故に識とは唯意識のこ

と也受生の一刹那は識のみ甚た強勝なるを以て之を識支と名けしものなり

四に名色とは結生の位より後眼耳鼻舌身意の六處の皆具する迄の中間の諸位をは名色と名けて(名とは心法にて色とは色法のことを指したるもの)結生より以后六處の具足する迄の中間は胎内に無道具にて住居し唯心識と色法のあるのみ其道具の備はらさる最初の位を羯刺藍と云此には凝滑とも又和合とも或は雜穢とも名けて父母に依りて受生の因縁を結び父母の穢色雜集和合し僅に凝滑なる色法の生するのみ夫より次を頞部曇の位と云頞部曇此に皰と譯して其形漸くはれものゝ如きを云次に進んて血肉を生す此位を閉戸と云閉戸は血肉の義次に健南を生す健南は堅肉なり次に鉢羅奢佉を生す鉢羅奢佉は是

支節の義なり支節生してより漸次に髪毛爪等及色根形相次第に増長して身体を成滿する位を云此鉢羅奢佉以前の中間の諸位を總て名色と名くる也

五に六入とは即ち鉢羅奢佉の位にて眼等の根を生するより(其根か境を緣して識を起す働を爲す是を根境識の三和と云)三和のはたらきを起さゝる以前の位の五蘊を六處と云是六處初めて圓滿して其根の相狀顯るゝの故を以て也扨爰に疑問ありたとひ胎内にありと雖ども身根已に成就すれは苦樂の境に對して身識の起らさるを得す是三和にあらすやと曰く此の位僅に身根か苦樂の境を緣して身識を起すと雖とも是甚た微弱にして且つ甚だたまたまのを也又未た眼等の諸根か觸境に緣して和合すると云にもあらす故に六處生してより三和以前の位を

六處と名くるものなり

六に觸とは出胎の後三受の因の異なるを分別了知せさる以前の名也乃ち苦樂捨の異なる處の分別を爲す能はす毒も之を食ひ火も之を攫み唯其觸のみを知る位なれはこれを觸支とは名けたるものなり

七に受とは右に述べし所の三受の因の差別即ち火は熱きもの之を攫めは手を燒爛し蜂は毒虫也之を取れは忽ち害せらる衣服は能く寒を凌き食物は能く飢を療じ風は以て涼を取るへく水は以て渴を癒すべしと云分別の生せしより未た婬貪の心の起らさる間を總して受の位と名けし者なり此位は五六歳より十四五歳迄の間のことにして苦受は偏へに之を恐れ樂受はひとへに之を取り唯受の用のみ是勝るゝを以て此位を受支とは

名けたるものなり

八に愛とは資具と嬉とを貪ぼることにて人も追々成長して十四五歳の頃に至れば前の受の行相は漸く進んで珍妙の具を貪ぼる心起り受の位に於ては衣は只身に暖かなるを欲し食は偏に口に甘きを好みしも今は然らずして食も玉椀象箸に非れは甘からすと云心起り衣も綾羅錦繡に非れは好ましからすと思ふ念を生し且嬉愛の情忽然と萌し男女の欲を爲さんと欲し共に以て之を愛するの心專らなれは此位を立て丶愛支とは名けたるもの也偖世尊か現在諸の煩惱の中に於て愛を說て一支と爲し何故に餘の煩惱を別に支立し玉はぬかなれば愛の味ひに過患あること餘の煩惱よりも極めて明了にして而も能く後有を感すへき勝因となるを以てなり又一切の諸の煩惱は愛を本

として起れはなり此故に愛を別立して愛は是後有を感すべき勝因なれは其過患を知らしめて以て之を對治するの法を求させんと欲し玉ふて也

九に取とは取も亦貪なり年已に長大にして愛の心愈々進めは次第に五欲の境に貪着して其五欲の諸々の境界を得んか爲に遍く四方に馳せ求めて倦勞を憚ることなく己か愛貪する處の物之を求めて得さるときは或は水火も恐るゝことなく多くの危險を涉りて前後をも顧りみす或は千里の波濤を越へても之を得んと欲し或は身命を銃鎗彈丸の下に擲うち以て之を滿足せしめんとほつすかくの如く貪愛の心增廣熾盛して境界を取るに堅猛なれは取支とは名けし者也

十に有とはまさしく能く當有の果を牽くへき業なれは有の名

を得しものなりとは右の如く愛を起し愈よ增長して諸々善不善の境界を馳求し彼を得此を求めんか爲めに衆多のよく當來の果報を招くべき淨及ひ不淨の業を積み集む其業は即ち當來の果報を有すると云義を以て此諸々の業をすべて有とは名けしものの也

十一に生とは當有を結生するの位にして其は此に依命を捨て彼こに當生をむすぶ其結生の一刹那のてにて即現在の識支と同一なる者也其之を現世には識支と名け當來には生支と名けしものは各其義の勝るゝあるを以てなり現在結生の刹那は前に已に述べし如く唯染汙の識心あるのみ故に之を識支と名くれども當來に於ては今世に業を造り己りたれは決定して當來の生を感すると云義に係るときは其生の相勝るれは生支の名

を得たるもの也

十二に老死支とは老死は即ち異滅の義にして正しく當來の名色六處觸受の四位の所有五蘊を總稱したるもの也今世の業よく後の有を感し結生するや否や前念の識は後念の名色の因なり前位の名色は後位の六處の因なり後念は前念に牽れ前念滅すれは後念生し前後因果生滅相續して次第に增轉す是を老死支とは名けたる也偖愛取有の三支をは老死支の中に攝せす愛收有の三支は是れ業感の性にして前の四支(名色六處觸受)の生滅相續して次第に增轉するか如きとは異なれはなり

偖是を三世兩重十二因緣と名くることは過去の無明行の二因に依て現在の識名色六處觸受の五果を感ず是を過現の一重と爲し現在の愛取有の三因によりて未來の生老死の二果を感す

是を現未の一重となし乃ち是三世兩重の因緣となる而して過去の無明は現在の愛取と一物にして行は即ち有也現在の識は未來の生と同法にして名色六處觸受は即ち老死なり前後相推して考ふれは其展轉輪換生死休むとなきの相もたろ〳〵分別せらるへし

右の如く三世轉換の因緣を微細に分別するときは諸君か過去世より今世に來り今世より轉して未來に至る其展轉無窮なる是は何に者か展轉し何に者か無窮なると思はる、乎或は靈魂の在るありて生を換へ身を受け苦を求め樂を欣ふなと、淺はかに思はる、乎見よ現在は過去の因の爲めに纔に有りて現在の因の爲に未來も亦纔かに有なるのみ若し已に過去の業因あること無けれは現身全く有ること無し現身既に無けれは何に由

てか當果の因を造らん因緣あれは此に果報あり因果の外又他に人を見ず己に人を(人は有情の總名)見されは森羅萬象も亦之れを見す故に世尊說て因果無人との玉ふ諸君是の如く了得し去られしならは所有邪見頓に滅して法性の理に體達せらるへし

古來より文武大達の英傑は和漢ともに好んて牟尼大聖人の見性學を欽慕して悟道に熟心する諸公多し蓋し見性を主學として傍ら勸善の諸學を見聞して內部を煅煉すれは智光德權を研究淬礪せらる異方便の一端ならんと思ま、かく餘論の筆頭を伸ばして物し侍べる抑〻武人は心性工夫の中に於て武事を修し文士は心性工夫の中に典籍を閲し農家は心性工夫の中に耕耘を勤め商家は心性工夫の中に貿易怠らす女性は心性工夫の中

に裁縫を勤む箇様に修學すれは一つも各自の業を妨害すること無うして却て心情に樂しむ處あり況んや工夫純熟して一旦豁然として貫通するに至つては則衆物の表裏精粗到らざる所なく吾か心の全體大用明かならずと云こと無しと云ふ好境界を得れは本人内部の歡喜究りなく大に心体の運動活潑の妙を得て性命保養の一端ともなり且つ一心を明かにすれは人間萬事是に應して調はさることなし大凡自己工夫の一事は筋力を勞するに及はす器械をも用ひす只心の中にて成すべき修業ゆる老人に在ても女姓に在ても一切出來ぬものはなし第一成しやすき好き仕事なり若し實に工夫調ひ大疑忽ち破れ大悟徹底するときは諸子百家の大意を委く見盡し數千卷の書物を見るに勝れり僧侶は百千の言敎無量の妙義一毫頭上に根源を識得

し武人は百萬騎の軍中に馳け入るとも無人の境を行く如き膽力調ふ是等の奇驗靈益あるを吾が門見性悟道の修徵と云ふ余も廿五歲の時俗諦を脫して此門に入り内部の煅煉を經て開明の人と成る爾來師家の鉗鎚を蒙つて智德を研究淬礪し品行を存養省察して日に新に日々に新にして今玆七十一上の馬齡に至れは愈々人文の修煉は見性悟道の術に過る法無きことを信得せり蓋し余か多年實地信得經驗せし一路を以て諸氏を誘引することなれは請ふ疑念を挿むこと勿れ此を以て之を觀れは吾門の悟心は賢にも依らす愚にも依らす學あるにも依らす無學なるにも依らす唯信心堅固志願剛强なる者悟入も快速進歩も亦快速也と知るべし

吾か禪門に於て今世眞正の師法を求むるの難きことは天上に

日を擇ぶが如し爰に於て學者若眞正の師に撞著せば先づ其懷を虛にし己れを委して師に事ふへし然らされば折角千載一遇の幸福を以て傑師を得るも徒爾なるのみ余前日一學士を攝す然るに己れか一旦の見を負ふて自から己れに勝れる知見なしと、思ひこみ强情に淺劣鄙陋の見處を吐て良もすれば抗抵することありたり其後悔非して降伏せり我見迷倒甚たしと謂ふべし所謂少を得て足れりとするものなり盖し大道は山の如く轉た登れは轉た高し余か近詠に「思ひ入る心の山の奥にこそ都に勝さる花を見る哉」とされは學道の上士は彌々了すれは彌々參し彌々登れは彌々搜くり深く心の山の奥を尋ぬべし毫髮はかりも已見を存して鄙見識に滯れば智德の進むためしなし假令百年を歷るとも益あることなし實に恨むべきの百年なり學

者如法にして師家の指示に背かず精密に工夫せば吃度靈益あるべし古德しば〳〵無上の大道と唱ふ若この一心佛性に是迄と云ふ修行の際限あらは無上の大道とは唱るじ諺に釋迦彌陀も今に修行最中と云ふは此ことなり大凡世出世間引統べて諸學諸術の中是に并ぶべき道とては無く是に超過せる學とては さら〳〵無し故に極度も亦窮り無きを以て無上の大道とは云へり有志の上士幸ひに眞正の師法に遇はゞ必ず容易の看を爲すこと勿れ

宋ノ曾文昭公曰。佛之道有出於名相文字可一言而盡者曰禪。其說謂。直指人心見性成佛。學者以心傳心。不必外求。其操術甚約。其收功甚速。非若他學之有次第階級也。文宋の眞西山この語を愛して天下に唱ふ俗學士と雖ども高見正識の者はかくの如く吾が學術

の優なるを稱揚して措かす然るに禪僧として此妙術に心を盡
さず徒に敎相文字に耽着して貴重の一生を空くする者あり敎
相文字に耽着して過ぐるものは尙ほ恕すべし方袍圓頂は姿の
みにして所謂衣架飯囊なる者あり又內部狂亂して苦々しく痛
ましき者あり大息に勝ゆべけんや
先づ坐禪工夫は聲をきく主を疑ふべし是見性學の捷徑なり昔
觀音菩薩のなし玉ふ聽法底の信心なり首楞嚴經に見へたり只
耳根を圓通門として悟を開かしむるの手段なり只今一切の聲
を聞くことはたしかに聞く主のある故なり耳を以て聲を聞け
ども耳の穴かきく主にはあらず耳は只聲を聞く道具のみにし
て耳より外に聲を聞く主慥にあると也若し耳の穴が聲を聞く
主ならば死人も聲を聞くべし死人にも耳はあれども聲をきく

こと能はず爰を以て知るべし耳は只聲を聞道具のみにして耳
より外にきく主のあることを平日聲のきこゆる時も聞へざる
時も聞主何に者ぞと推返し推戻し深く疑ふべし一身のちから
を盡し先きにあてをせず悟らんとも思はず悟るまじとも思は
ず小兒の胸の如くにして愈々深く疑ふべし又種々の妄想が少
しもあらん時は是は工夫の疑ひ弱き故なりと心得て彌々深く
疑ふべしいかほど深く疑ふても聞く主知れざる物なり知れざ
る處に就いて此時彌々深く推究むべし古德曰料簡更に絕へ果
てゝ如何んともせられざる是好き工夫なりと云々されば前後
左右を顧りみず一心不亂にして爰に我身のあることを知らず
大死人の如にして深かく疑ふべし段々深く工夫して茫々とな
ることあり此ごき又聞主何に者ぞと大疑を起し通身汗を發し

大死人の如にして彌々深かく疑ふべし後々には大死人と云ことをも知らず大疑工夫と云ことをも覺へず通身大疑團と成てある内より大夢の覺むる如く死に果てたる者の丶急に蘇みかへりたる如く忽然として大悟と云處に超出す

如是大疑情を凝らして工夫を成さば悟道見性何んぞ時刻をかぞへ歳月を積ん若し眠り工夫なぐさみ工夫に致し分別知解を存して見性を求めば恰も木に倚て魚を求むるが如し毛頭も自己の情慮を加へて見性を求めば東に行くべき者の丶西に赴くが如し工夫若し大疑情無んば坐して百千年を經るとも悟る日あること無けん古人大疑の下に大悟ありと云ふは是れなりさきに云う如く疑情を起して工夫をなさば一夜にも悟り一時半時にも悟るべし老少の差別なし十歳にても悟り十三十四乃至

十五十六の女子すら悟りたるためし少なしとせずと古人云へり況んや血氣雄壯の男子丈夫をや諸方參學の諸氏淳朴貞實にして道を學すと雖ども往々龍頭蛇尾となること此工夫にも如何程工夫を成せは悟ると云限り有ることを聞かざる故なり此工夫にも慥に限りあることなり工夫のかきりと云ふは大疑の一念底に透るほと工夫をなせば百人は百人共に大悟し千人は千人共に大悟あることなりゆめ〳〵疑ふべからず

三祖大師信心銘に不レ識二玄旨一徒勞二念靜一とある兎角世間の佛法者の胸中には佛見法見の雲霧か深く遮り其障礙に支へられて佛法眞の玄旨あることを知らぬ故佛惑法縛を蒙りて妄りに輪回を受るもの多し佛其衆生の妄想繫縛を解脫せしめんか爲に種々の法門を說き玉へは又其法門か障礙と成て佛見法見を起し

佛の玄旨を識らす是の故に吾か初祖西來して本分の一段を指し示し此の心を以て心に傳ふ是を教外別傳不立文字と云ふ然るに或る思想家の學士か禪家不立文字の教を盛んにして天下の人民文字を忘るゝに至らは如何と論出つせり錯々差過了古語に事を聞て眞ならされは鐘を喚て甕と作すとは是等の論を言ふならん試に吾宗不立文字の旨趣を論せん蓋し言語は載道の器也と古人も言へり今袱盆を出だして玉を受く玉を得れは袱盆は不用なり道本無言因言顯道見道即忘言猶魚を得て筌を忘れ月を見て指を忘るゝと云ふ皆同一の理なり佛と問へは麻三斤と答ふ麻三斤の妙處を得れは見性成佛せり見性成佛せし後は麻三斤は不用なり是を教外別傳不立文字とは云ふなり文字を用ひさるにはあらす文字を立てさるなり百丈祖師の所謂

靈光獨耀迥絶根塵體露眞常不拘文字と云ふ義を知らば不立の義も明らかならん

先賢の語に人の道として人に遠きは以て道とするに足らす又曰夫婦の愚不肖も以て與り知るべしとかく迄も實に至親なる妙道なるを人として知らさるを人文開明なる目出度き昌代の人とは言ひ難し故に吾か輩の論は世界の人悉く皆人間固有の明德を發明するに到らは眞の人文開明の昌代と稱すべし未た自己人文の德力を得すして我は凡夫と思ひ自ら甘つて鄙屈陋劣に陷りしより遂に「ゴット」の奴隷とも成る愚痴者も間々有るに至る愍笑するに堪たり故に吾見性の妙法盛んに行はるれは自づと眞の人文の最高等の化世界に旺する徵候と謂ふべし

偖此一章は初心學徒の爲に直指人心見性成佛の義を解說せん

則ち自己の明德を發明して心性を悟ることなり直に一心性を指して明了にすればすくさま佛に成ると云ことにて決して死して後のことに非らす只今直さまと云ふ程のことなり世間の人の思はくにては今生にて後生と云ふものを願ふときは死して後どこともなく佛と云ふものに成る樣に推量して然も慥に成るならさる譯も知らす何にか向ふにすがり物を拵へ目くらの杖を賴みにしたる如くよりすがらせるを以て佛法者と思へり愚迷も亦甚はたしと謂ふへし惣体妄想の固結を解散せしめて洒々落々の境界に到らしむるこそ佛の眞趣意なれ何そ衆生の心を佛にまれ法にまれ固結せしめて得たりとするの佛法あらんや若し人心を固結せしめて得たりとするの法ならは彼の「コツト」の異術に等し是甚た怪しむへし信するにたらす眞の成

佛を遂ると云ふことは定慮工夫の力を以て直に一心を明らむれは不生不滅の全体によく至りたる處を謂ふなりかくの如く能く到りたる人を佛とも大菩薩とも名つけたり佛道の本法菩提の道は皆斯くの如し中々遠々しきことにあらす今時の人悟りと云へは何にか勝れた再來の人か或は拔群の僧の成すべき仕こことにて吾か輩凡夫風情の企て及ふとに非すと思へり大ひなる誤りなり此一心を悟る工夫の信心は只末世の迷ひの凡夫のみ爲すべき修行なりと心得べし

さて如何んか菩提心を起すべきとならば先つ世間の相は本より非相なりと信じて見聞覺知に於て有と思はす無と思はす生と思はす滅と思はす諸々の道理をなし或は料揀分別を成すべからす假令妄念暫時起るも再び續かす又顧みるとも勿れ如是

ならは諸々の事に於て執着住着あるべからす是先つ菩提に入る路なり此に於て又茫々として何とも知らぬ取付く處なしと思ひて疑をなし退屈すると勿れ少しきも取りつく處あるは皆輪回の業也何とも知られさる即ち生死を出て丶煩悩を離る丶處なり只斯くの如く深く信して何とも計り難き處に直に眼をつけて行住坐臥念々怠らす志を進めて究めて看よ必す覺る時節あるべし是を菩提心を起して現身に成佛する人と云也たとひ又今生にて悟ると遲しと云とも此信力強くんは諸々の悪業を轉じて永却人身を失せす願心を成就して大安樂の地に至るへし疑ふとなかれ

悟りの前の善悪は善悪共に善也迷ひの前の善悪は善悪共に悪也と云古語あり是明言なり譬へは爰に人あり云く今生にて偽り云はす殺生を作さす無理を云はす盗心なくんは後生を願ふともいらす又工夫信心するにも及ばさらんと云あり是迷ひの前の善なれば大に悪見也是は無事甲裏の悪見と云に屬して人生一つの大病也其道の達人に寄りて聞かさるの過也昔子路未た孔子に見へさりし時天性仁厚にして一鄕に勝れたり或る人子路に言て曰く師に依りて學ぶべし子路か云く我れ何んそ師に依て學ばん不義はせす不仁は作さすと或る人是を孔子に告ぐ子の曰子路の如きは譬へは山中の直き竹に似たり只是山中の美竹たるのみ人の調法とならす若し此の竹を以て矢師に作らせは箭を付け羽を致して空を凌く能ありて國家の調法たらん子路か如きは是に似たりと子路此言を聞て驚て孔子に學ふ誠に孔子の語を仰きつべし子路か如きは直に志を改めたり眞

とこの道に入るへき哲人は是の如し

冥々の處にては猶愛昭々の行ひあれとは遽白玉の箴言也我身日夜の振舞わが心に寫りて掩ひ藏すとあたはす是を淨玻璃の鏡と云是は隱れたる所なれは是は心中にひそかに思へは他人は知らしと思ふは愚かなるを也好も惡きも一旦うつれは消すに消されぬは樂しむべきとじや凡そ人間の苦樂昇沈福殃夭壽皆此鏡より形を生するにあるを必定決定きはまつたとじや

鵠林翁云へり今時の悟りは無念無心を認めて唯そこを說ばかりじや刀も打ぬ前に鐵を煆へるがたもじや夫れで三條小鍛冶は千日煆ふた學者も隻手音聲夫れより段々難透の話を以て煆煉修しもて行かねはならぬ上がた回りの默照を認めて一生說ても埒は明かぬ

世間の工夫に桶の内の底にオキを糊にて附て是を水の上に伏せて眞直に水の内へ押こむに桶の内へ水入らすして火か消へさるなり是は桶の内に天地の正氣か一杯滿ちて有る故に内か塞さがりて水の入るべき處なし少し成りとも桶かゆかみ傾きてあく方あれはあきたる方より氣か拔けるによりて水は氣と入代りて桶の内へ水か入る程に火か消ゆるなり人も是と同し元來天地に瀰淪してある正氣主心となつて體内に實してある故魑魅魍魎なぞは窺れぬ筈なり若し少しなりともこちらにゆかみくねりかあれは忽ち色欲財欲名欲等の魑魅か入かわつて主心はなくなり正氣は拔けて自ら邪神惡魔の栖み家となるを知らす恐るへしされは此の主心正氣を失ふをは實に刹那の間にあるへし因て學道の人平生小事は大事只々細念の流注を

堅く愼しむへし

正受老人云へり我れ俗に云へる一日暮しと云ふを覺悟せしより精神甚た健かにして養ひに術を得たりと誠なる哉余初め發心の時或る僧正受老人の一日暮しの譯を話されしを聽て甘露を飲むか如くに思ひしなり夫より毎日其心にて行事怠たらす次第に身も健かに成り事も能く辨して空しく過くるの光陰なく今日に至て見れは實に余を玉に成せし明言なれは公衆にも諭して然らしめんと欲するなり其の譯は左の如し

人の命の無常なるとは山の水よりも過ぎたりと經中にの玉へる如く一生と云へは長き樣に思ふかなれとも今の事やら後の事やら明日の事やら十年さきの事やら誰も知る人は有るまし自から自からの終焉の期は量り難きものなれは先つ明日は無

きものとすべしされば曉目覺めぬれは今日限りの命と思ひ疾起きて盥嗽し內道場に入て一日の課誦を勤め了りて後ち書きたきとは書き作したきとは作す大凡其日勤むべき行すへきと殘る所なく勤行し又人より頼まれしと約せしと目上の方より命せられしと共倩ら思ひ出し夫々辨するに如何なる苦勞なるとも今日一日と思へは大抵は不勤をせす身を使へは其內に運動して日一日と思へは大抵は不勤をせす身を使へは其內に運動して氣分も好くなり醫師にかゝるとも累年なかりき是全く一日暮らしの功驗なり修行の上も亦然り今日計りと思へは工夫も格別出精して道念純一になりはかゆくとを覺たり寐るとき今日も目出度修行せりと悅んで枕に臥せり日々如是就ては百丈大師の一日作さゝれは一日食はすとの玉ひし明言きもに銘し

てありがたく思ひ奉りぬ何事も今日一日と思ひ勤むれは五十年百年も同しことなりこの通り一生せねはならぬと思へは實に大義にして堪へかたからん故に此の一日くらしの教へは誠に養生の妙術精勤すべき確言にして是を遵行する者は逆境に逢ふて屈するの念を生せす何ん等の難事と雖ども成せんを必せり老衲か今歳七十一上の馬齢に至る迄實致經驗し來りて功驗を見し一大好事なるか故に這回勸善の餘論を綴つるに一章として後鑑に遺しぬ故に文明日進を冀圖する輩等閑りに思はす實致試行あらは幸甚

善惡の二業かず〳〵あれども先つ物の命を救ふより大ひなる善はなし物の命を傷損するより大ひなる惡はなしと先賢も云へり百行の中に於ても仁心を第一とし二百五十戒の中に於て

不殺生戒を最首となす以て知るべし如何となれは本と此一切生ある者は同一佛性にして平等周遍なる者なれは也且天道は生を愛す人の人たる所以のもの又天の性なり暫時も生育の仁心を欠べからす孟子は惻憱の心なきは人に非すと迄斷言せり宜べなる哉人を萬物の最靈と崇とふも只此の惻憱の心あるを以てなり夫より下たる一切の衆生は互に相呑噉して相負ふて惡趣に墮す然るに人として己か嗜欲に惑ふて明德の仁心を昏ましし他の類は畜生なり眇小なり不靈なりと欺瞞して恣に殺戮を行て己か暫時の口腹を養なふものならは彼の噉食底と同一のみ更に最靈たる所以の德權を見る所なし孟軻は惻憱の心なきは人に非すと云ひしは果して畜生なりと云を證明するに足れりされは黄庭堅詩曰。我肉衆生肉形殊性不殊元同一種性唯是

隔形軀苦惱從他受肥甘爲我須莫教閻老判自揣看何如蓋し君子に四不食の戒めあり一つには聞殺不食二つには見殺不食三つに自養者不食四つには專爲我殺者不食況んや自ら殺し自ら喰ふをや天道豈に是を惡まざらんや屠割を受るものは切刻されて復た鼎鑊に入れらる種々の苦痛まことに堪へ難かるへし世間の牢獄に入れられ刑戮を受るものは皆重罪のもの也輕過の者は自ら預からす蘇老泉云へり予性不喜殺故に生物を害するを務めて省く只蟹蛤を喜ふ爲に殺を斷するを能はす去年罪を得て獄に下る始めは免れさるを意ふ既にして脫するを得たり是より遂に一物を殺さす人蟹蛤を餉らるゝあれは即ち江中に放つ活理なしと雖とも萬一を希かふ便ち活せさらしむるも亦烹煎せらるゝより勝れり自己患難を免るゝを得るは雞鴨

の庖厨を脫するに異ならす復た口腹を以ての故に生類をして無量の怖苦を受しむるに忍ひさるのみと云々是等は悔非改過者ならさるの人なり必其宿罪の業報を受けさるへし昔鄧隱峰と云人あり未た出家せさりし時曾て一疋の猿の子を射る地に墜て死す須臾あつて母猿また其處に來て死す峰怪んで其母猿の腹を剖て開き視るに腸寸々に斷れたり遂に射業を擲ちて出家す後勝れた智識に成られたと云是を以て知るへし凡そ血氣あるの屬皆靈智を含むを人間に異なるをなし恩愛の情に於て何そ深からさらん是等のことを思へは古來殺生を以て罪行の最第一とする固に然り張天覺曰く人は最靈たりと雖とも苟最靈たるの理を明らめて害心を捨てゝ仁愛を生するを能はす眷々然として嗜欲を以て務めとなし種々の惡業を成さは倏忽二三

十年の間に於いて彼となること何んぞ疑ひあらんやと云々佛、楞嚴經に明說を出せり言以人食羊羊死爲人人死爲羊如是乃至十生之類死々生々互來相噉惡業俱生窮未來際云々實に怖るへし只帝王と一國一郡を宰制する人號令を出して時を以て狩する是れ公にして一向論なし殺を蒙むる物命も國法なるを知つて恨みなからん昔南宋の文帝求那跋摩と云へる大德に問て云孤耻らくは身國事に徇て齋戒不殺を欲すと雖とも安ぞ如法なるとを得へけん跋摩曰帝王は匹夫の修する所と異なるへし帝王は只其言を出し令を發するとを正しふして人神をして悅和せしむ人神悅和するときは風雨時に順ふ風雨時に順へは則萬物其所生を遂くこれを以持齋とすれは齋も亦至れり此を以て不殺とすれば德亦大矣何んそ必しも半日の殘を輟め一禽の命

を全ふして而后弘濟すと云にあらんや帝几を撫して之を稱して曰く公の言の如きは眞に所謂天下の達道なり以て天人の際を論ずへしと賞歎せり只愼しむへきは私殺なり私殺の一匹は公殺の百疋に充ると古賢云へり或は禽獸は生て靈無く死後魂無し故に殺生不妨と云へるは天主邪敎の家言なり吾が君子國の人彼れが欺瞞を受くるとを莫れよ

吾か見性成佛の宗敎の如きは他佛の光明を仰かす各々自佛の大光明を放たしむるを主意とす譬へは文明立憲の政體の如し一切衆生の束縛を解いて自主自由の德權を飽まて領し大安樂の境界を得せしむるを謂ふ異敎の宗意を見るに耶蘇の十誡の第一に「コット」の外に神ありと思ふ勿れとある恰も封建の時勢に一國に國主より外に人ありと思ふ勿れと云ふ如く誠に野蠻

擅制の政体に似たり其教法を信ずる人は譬へは政府の束縛壓制を受る民の如し何んとなれは自性の大光明を壓抑して只天主「ゴット」のみを貴き者と見成しなさけ無くも自から成り下つて「コット」の僕と云是自己の靈妙を極々頑愚の者と自棄して彼の天主獨一なるもの丶命令に伏せしめて奴隷小者の如く卑屈束縛せらるゝとは苦が〳〵しき野鄙陋劣の教法なり野蠻國の政府が獨權を逞ふして人民自由の權を束縛して虐たけ使ふに異ならず

法華經に客作の賤人直に是長者の子と佛のの玉ふ通り一念信心の向ふ處刻苦光明盛大なれは今日の凡夫が明日は聖人と成り今日の日雇とりが明日は長者の子となる是即ち吾が見性成佛の妙術にして佛に妄語なし然るに其金言を信して自性の智

慧德光を磨き出たそうと云根性も無く空しく手を束ねて我は凡夫なりと自ら退縮して怪しき束縛を受けて足れりとする者は譬へは大福長者の子が薦を蒙つて寶藏の前に在て袖乞するが如く笑止千萬なること共なり彼若し氣慨を發して我れ本と大福長者のむす子なりかやうな下劣な根性で人の杖下にすがる樣なことでは捌けぬと一奮激して智德を究研するときは忽ち長者の跡繼ぎとなり一切の大寶我が手裡に歸し何の不足なく自佛の大光明を放つて自主自由安樂の身の上と成ること更に疑ふべきなし之を人文開明昌代の人と云

蓋し一心の宗規を立て丶人文開明の昌代に應ぜんと欲する僧侶は從來の宿弊を矯正して開明の精神を盛んにし僧寶の三學を研究するに如くはなし何をか僧寶の三學と云戒定慧是なり

則ち佛教中最第一の妙則なり規律に依て其心を攝し一念動せざるを戒と云ふ覺性圓明にして內外瑩徹なるを定と云ふ緣に從ひ物に應じ妙用窮りなきを慧と云ふ首楞嚴經に佛阿難に告ぐ汝常に我が毗奈耶の中に三決定の義を宣說し修行することを聞けり所謂心を攝するを戒とし戒に因て定を生じ定に因て慧を發す是を名けて三無漏の學と云ふと然らば則ち戒法は定慧の魁にして吾が僧侶社會開明の原素たること言を待たず衲按するに佛法中に戒律を重んずることは譬へば國家の武備を重んずるが如し武備ある故に社稷鎭靜なり社稷鎭靜なるが故に國力强盛なり苟も國家武備を忘るゝときは魔黨蜂起し士風衰弱し國體萎靡して遂に滅亡に至らん緇門若し戒律を忽かせにするときは諸規則紊亂して宗風振はず僧侶不淨の心行鄙陋

の作業至らざる所なし檀那の歸依信心も次第に頹敗し竟に法滅の時節に到らんされば梵網經に佛誡めて言はく正戒を犯す者は一切檀那の供養を受くることを得ざれ亦國王の地上を行てを得ざれ國土の水を飲むことを得ざれ五千の大鬼常に其前に遮つて國賊と云はんと是破戒の僧あれば諸天善神其國を守らず國益なきが故なり果して知るべし衆庶の信心を得眞の佛法を天下に興隆せしめんと欲せば持戒を以て基本とすることを然らば則ち僧侶人文開明の精神は持戒を主とすべきと更に疑ふ勿れ

前日德川氏歸佛奉釋の餘り格別佛戒を重んじ破戒濫行の僧は三日晒の上流刑に處せられし元來國律と佛律と交へ行ふは正議にあらずとて維新以來佛律は佛の誡む處に還し一切政府に

關せられず只四民の公法を以て僧侶肉食妻帶勝手たるべきの公布ありたり且從來不律不如法を以て罪に陷る僧侶多きを以て兼ねて公明至仁甚深の朝旨なれば清僧たるもの朝廷仁慈の程を戴き佛の嚴戒を遵守して愈々謹慎すべき筈なるに左は無くして慈悲垂れは屎垂れると云ふ諺の如く破戒濫行の魔僧等却て此上もなき好機會と思ひ愈々魔心增長して冥報の怖るへきを怖れす清淨の道場を穢し剩さへ其徒弟迄も誘惑せられ精神を紊亂して皆其邪行に傚はんとす大凡そ嬉事濫行は一とたび指を染むれは浸入の甚はたしきものにて悔悟の期あるとなし故に佛世尊都て婦女餐肉等を以て苦痛の物とし堅く禁戒し玉ふものは人間の愛縛習氣浸染の甚しき輪回苦集の根本なるか故なり且其惡毒傳遷の速かなると傳屍病の如く其身を斃て

猶止ます遂に其院を破毀して其餘毒始めて消散するものなれは寺門の衰廢は申に及はす僧侶人文開明の昌代に當て他を化益するの精神を殘害すること虎よりも猛し豈に恐れさるべけんや

前章にも論せし如く吾か別傳見性の妙術は恰も文明立憲の政體の如し一切衆生內部の束縛を解いて智光を開發し自主自由の德權を飽迄領し大安樂の境界を占め得せしむる妙法なり蓋し自己の德權を得て內部の精神を開張するは至て高尙なるこにて人智暗昧の世時勢未開の邦に行はれさるは又言を待たさるなり故に吾か見性の學は文明國に相應して野蠻未開の邦には決して相應せさる希有の妙術なり彼の歐洲の如きは文明國と稱すれとも是れ皮相上の稱揚にて唯外部の器械湊巧世智

敏捷の開明のみ內部に至ては實に鄙屈陋劣の精神なりと吾輩は想像せり何んとなれば其人民或は衆神を貴び又は一神を敬し互に信帶を固くし身命をも擲ちて歸依奉崇し自己貴重の精神を彼の「コット」の貺物とのみ思ひこみ心志を束縛せられ只管畏縮して其奴隷となれり是全く開國以來習慣の致す所にして但只新舊約書の範圍中に籠絡せられしもの也彼の地の哲人か歐洲の人民は只是習慣の奴隷なりと言ひしは實に明言なり去れは外教の如きは彼の開明の國には甚た不似合の教法にして最も遺憾に堪へかたき事共なり就ては吾か別傳見性の教法たる自性の本覺圓滿を期するか如き妙道は異宗外教者の未た嘗て夢にも染指嘗味せさる處なれは渠等は只黃卷赤軸上に見聞する世間尋常の佛法を佛法の眞面目なりと認得し勿論言教中

に奇特の意味あることをも究めす只髣々髴々地に推量する而已況んや吾か教外別傳に甚深の眞理妙義あるをを知らんや然りと雖とも萬邦文化の開明する人人は競ふて學を勤め識を磨き彼の天道理化等を講するの深き人智進歩の功駸々然として實に驚くべし今一層を進めば賾を見性之道に探くり蘊を別傳の法に索むるとは當然の理なり日を積み月を累ねず必ず自性圓滿の眞理を研究淬勵するに至るは必然なり既に文化全開けたる佛蘭西國の如きは固よりかの魯英諸邦に比すれば常に神教奉持の人に乏しく近來に至りては大に宗教の威權を減せりと云又英國の如きも比來「ミル」「スペンセル」等の輩出て〻頻りに精理の新說を唱へしより甚だ宗教上に困難の影響を與へ大に人民習慣の迷ひを解泮せしむるに至れりと云又アメリカ合衆

國に於ても精神靈魂の昇沈如何に大に心思を傾注し曾て會社を建て黨派を組み以て隆盛の色ありと聞けり是則アメリカ無神黨の起りし所以なりと云之を要するに目今世上の少しく理を會し事を知る者は洋の東西となく陸の南北となく自己の自由を崇ひ精神の特權を重んずるは野蠻暗昧のアフリカ又ハインジヤ等の人種を除ての外は皆是熱心に企望する處の者なればなり既に數千年腦裡に浸入せし迷熱をさへも解脱し自己精心の權路を開んとするは右の如く歐米各國に於て早端緒を開きたりと謂べし佛人「キゾー」氏は歐洲文明史を著して宗教を以開明の一大眼目一大元素也と稱せり蓋「キゾー」氏のみならず諸學師共に揚言する處にして疑を容る可からず何を以宗教は開化の元素文明の眼目ぞと云に抑宗教なる者は人の肝膽に入り

其精心を鎔冶し其性を成し其質を定る者にして膚受皮認する所の者に非す故に其教にして陋なるや必其人を陋にす其教にして明なるや必其心を明にす因て元素と云又眼目と名くべし予殊にあやしむ吾朝近昔本居平田等か禽獸草木一奇一怪盡く神とする一家言を擧て教法か問敷喋々喃々弘通を助る者あるを是未開の時勢人情止を得ざるの一手段かは知られ共左乍ら野蠻亞非利加の慣習動物を崇奉して牡牛を神とすと二の舞に髣髴たり誠に捧腹に堪たり目今世の開明に從て宗教者は教を以て民心を明にし安身立命の地を知らしめ自己の精神を他に依賴するの鄙屈心を脱せしむるか其職也蓋自性圓滿の眞理を明瞭にし大安樂の心地を占むるの術を操る甚約にして其功を收むる甚速なるは禪門別傳見性の法より勝たるは莫と宋の眞

西山定論せり是に於てか方今上等社會の人物吾門に入て此別傳の法に傾心注志する者少からす然と雖とも吾見性の大事は天下無比の道法にして一朝一夕の修學にして領會し得へき者に非す悟後の修行を最も緊要とすちつと計の猿のふんどしの樣な悟を抱て居ては引ばり足ぬぞ所謂法窟の爪牙奪命の神符と云ふ秘手を帶て居ねは今時の學者は接得せられぬぞ古人笈を千里に負ひ錫を異域に飛し霜辛雪苦身命を抛て深承當するは即是也希は有志强力の士愈志力を振て智德を擴明し精進幢を卓立せられんを

右に陳述せし處は見性家內部を煅煉するを以て人文開明昌代の精神とする趣意及ひ其他先づ勸善を主眼として余か記臆せし些子を論出せり吾か讀者諸君此の些子を詳明に會得されし

以上は各々內部五蘊の迷ひを發明して智德淬煉の補助に充てしめんか爲めに老僧眉毛を惜ます心經の眼目を下文に撮出して內部開明の說を畢ゑん抑もく此心經の示釋たる予か弱年の時黃檗鐵眼禪師の衆の爲に提唱せられたる者を寫本に就て發見し恰も患盲の忽ち明を得たる如くに感得して大に初志を策進せしものにして余か臆說にあらす今此の書を論述する序に書囊を搜つて法施に充んか爲に擧揚するものなれば諸君此の說を信して實地體究するとあらは內部精神を開くに於て大に力を得ると有らん

勸善餘論之上終り

勸善餘論卷之下

湘江　虛舟子　著

前編に方今人文開明の昌代に當る人々には先づ一着に自性本覺圓滿の眞理を明瞭にし智德淬礪を以精神とすべき所以を細論す因て心經の眼目を探つて金言微妙の奥頤を掲出し兼て先德より承り臆記せしを共を寶惜せす諄々叨咀して吾か勸善會員諸氏内部の修煉に便りす請ふ眼を定めて深察せよ言彌よ察すれば義彌よ深からん敢て文の和解するを以て輕忽に看過するを勿れ

心經に云く五蘊皆空なりと照見すれは一切の苦厄を度すと此意は五蘊本より空にして無き物なる事を悟りて其理を明らかに照し見れは一切諸々の生死の苦患厄難を度脱して法身般若

の體に叶ふと云ふ意ろなり五蘊と云ふは色受想行識の五つなり五つの科異なりと云へども唯身と心との事なり初めに色と云ふは身なり後の四つは心なり一切衆生は本より涅槃常樂の體にして法身般若の智身なれとも此五蘊の色身の迷ひ故に凡夫と成りて三界に流涙するなり五蘊と云ひ色身の二つと云へとも總べて只一つの迷ひの事なり

第一に色と云ふは我か此身なり又世界の天地草木に至る迄形ちのあり色の有る物は皆此色のうちなり楞嚴に一切衆生無始より以還已に迷ひて物として本心を失て物の爲めに轉せらると云へり此意は一切萬法は皆法身眞如の體なることを知らすして却つて天地の中の萬物と思ひて其萬物の境界に迷ひて物の爲めに我か心を轉せられて樣々の妄想を起すと云ふ事なり

亦古人法身は形殼のうちに隱ると云へり形殼とは此身なり此身は本より法身の體なれとも法身なることを知らすして我か身と思へるは法身を見隱して我か身と思ひ吾か身に迷ひて貪瞋煩惱を作り深く惡道に沈むなり素より法身の如來なるを迷ひて萬物と思ひ亦は吾か身と思ふには二重の迷ひ有り先つ一重の迷ひは此身は地水火風の四大を假りに聚めて造り立てたる物なり身の內の皮肉筋骨の類は土なり涙涎血等は水なり温かなるは火なり出入の息と搖き働くは風なり此地水火風を離れては我か身と云ふへき物なし唯今なりとも命終りて地水火風本に歸りぬれは唯白骨と成りて露程も我か身と憑むへき物なしかゝる淺間しき白骨を我か身と思ひて千生萬劫この洒れ頭につかわれて地獄の業を而已造つて三塗に沈み果るは愚か

に淺間しき事に非すやかゝる地水火風の假りなる身なることを知らすして我か身と思ひて千萬年も死す間しき樣に思ひ我か身そと堅く執着す是一重の凡夫の迷ひなり併し亦二乘は凡夫よりも智慧賢き故に此身は地水火風の假の物そと能く見諦らめて此身を誠の白骨のやうに見なし身に於て塵程も執着の心なし曾つて此身の爲めに我執我慢をも起さす貪恚の念をも起さす僞りへつらゐも無く嫉妬誹謗をもなさす此の如く悟りは開けぬれども未た此身の法身如來なることを知らす之に依て世尊小乘とて大に嫌給へり彼の法身の當體を悟らさる故に二乘の智慧にては佛の內證菩薩の境界は未た夢にも見ず是亦二乘の一重の迷なり先きの凡夫の迷と共には二重なり二乘は法身に迷ふ事一重凡夫は法身にも迷亦二乘の悟りし處にも迷

ふ故に二重の迷なり菩薩は凡夫と二乘との二重の迷を越へて此身を則ち法身如來と見給ふ是を心經には色即是空空即是色と說き給へり色と云ふは此の身なり空と云ふは眞空眞空は法身法身は如來の事なり偖は此身則ち法身法身即此身と云ふ意なり二乘は地水火風本より法身の體なることを知らすして地水火風は非情の物なりと思へり菩薩の眼にて見給ふ時は地水火風皆法身の眞體なり是の故に楞嚴には性色眞空眞空性色と說き給へり色と云ふは地の事性と云ふは此地は素より法性の體なる故に性色と云ふ性色なる故に即ち眞空なり亦同經に水を性水眞空眞空性水と說き火を性火眞空眞空性火と說き風を性風眞空眞空性風と說き給へり是も始の地の如く水即法身法身即水火即法身法身即火風即法身法身即風と云ふ意ろなり此

の如くなれば地水火風は素とより地水火風にあらす法身眞如の妙體なるを二乘と凡夫とは迷ひて地水火風と思へり若し地水火風本より佛なることを悟りぬれは我か此身初めより法身なるのみに非す天地虛空森羅萬象に至る迄皆悉く法身の妙體なり此悟りの開けし時を諸法實相とも云ひ草木國土悉皆成佛とも云へり草木國土のみに非ず虛空に至る迄法身の體なるを迷ひて虛空と思へり此悟りを開くる時虛空と思ひしも消えて萬法一如の悟りとなる此故に楞嚴には一人眞を發して源に歸すれは十方の虛空一時に消殞すと說き圓覺經には無邊の虛空覺に顯發せらると言へり吾か禪家には大地平沈し虛空分碎すと言へり亦極樂を黃金の地と說き給ふも此事を凡夫の爲めに名を更えて說れたり此悟りを開きて見れば我か身は我が身な

から本より法身の體にして生れたるにも非す生れざる身なれは死すると言ふともなし是を不生不滅と言ひ亦無量壽佛と言ふ生すると見る死すると見る是を迷ひの夢と名づく我か身既に其の如くなれは人の身も其の如し人間其の如くなれは鳥類畜類草木土石迄皆然らすと云ことなし水鳥樹林念佛念法念僧の聲を出すと阿彌陀經に說き又十方の諸佛廣長の舌相を三千大千世界に出して法を說き給ふと宣ひしも此時の事なり法華經の中に諸法は本より以來常に寂滅の相と云ひ亦は法は法位に住して世間の相は常住なりと說れたるも皆此悟りの開けたるを宣ひし處なり能々工夫して色蘊の迷ひを越へて法身實相の體に稱ふべし

第二に受と云ふは納領を義とすとて物を受け納ることなり是

は眼耳鼻舌身の五根に外の六塵の境界を受け納るを云ふ眼には色を受け耳には聲を受け鼻には香を受け舌には味ひを受け身には觸をうけ納むるなり此受に苦樂捨の三受と云ふことあり先づ苦受と云ふは眼耳鼻舌身の上に好まざる苦しきことを受るを云ふ樂受とは眼耳鼻舌身に於て快よく樂しみなることを受るを云ふ譬へは道を行くに手を振りて行く樣なることは苦にても樂にてもなし其如く目に見ても何ともなく耳に聞き口に味ひても何ともなき樣のことを皆捨受と云ふ衆生は此苦受樂受に迷ひて苦しきことは目にも視じ耳にも聞じと思ひ只樂なることを目にも見耳にも聞き鼻にも嗅き口にも味ひ身にも觸れんと計り思ふ故に人を惱まし我か身を苦しめ盜をもし僞りをも言て物を貪り魚鳥の命をも斷ち世界の妨けとも成ること

とを工みて日夜に地獄の業を作るなり是は樂をうけんと思ふ一念の迷ひの意より無量の苦しみを生するなり世上の盜みをする者の酒を飲み肴を食ひ婬欲に耽りて遊女なとを愛し衣裳までに奇麗を盡さんと思ふ纔かの樂しみを貪る心より盜をもし僞をも言ひ遂に其惡顯れて牢獄に入り責めに遭ひ其身を亡すは少しの樂しみを求る意より起れり求めあるは皆苦なりと古人の言へるは此意なり喩ば夏の虫の火に入るか如く淵の魚の餌を貪るに似たり露計の貪りを求る意ろゆへにあたら身命を亡すなり一百三十の地獄の苦しみ三品九類の餓鬼の飢へ披毛戴角の畜生の姿弓箭刀杖の修羅の有樣一つとして貪り求る心より起らさる苦しみは無し一滴の甘き樂みを受んとて萬刧の辛き苦みを受る淺ましき迷ひに非すや亦此苦と思ひ樂と思

ふことは素より苦も苦にてはなく樂も樂にては無けれとも迷ひて自ら樂と思へり其故はいかにと言ふに鳶烏犬野干なとは牛馬の死して腐れるを視るか亦人の死して爛れるを見ては是を類も無き物そと思ふ故に先つ眼に是を見て悅ひ鼻に齅ぎ口に味ひ足手に踖みては益怡ひて是を第一の樂と思へり人の上より此を見れはむさく汙らはしきこと限りなし若しかゝる腐れ物を人に強て飡しめは其苦しきこと類ひ無かるべし人に食はしむればかほとに苦しき腐れ物を鳶鴉は却て樂と思ひて貪り食ふ是れ樂には有らざれとも其意愚に賤しくして苦を樂そと思へるなり人間の樂と思ふ事も其如し愚かなる心故に妻子に溺れ財寶に迷ひ魚鳥を食ふて樂とす佛菩薩より是を見れは人の上より鳶鴉を見るよりも猶淺きし是を以て推し量れは迷

へる人の樂と思ふは苦を以て樂と思へるなり亦人の大罪なとを成せし故に公けの譬めにて其罪人の子や妻を目の前にて殺しつゝ料理して是を食しめは目に見るも口に食ふもさこそ苦しかるへし人魚鳥を食ふも其如し悟りの眼より照し見れは魚鳥も法身の如來にして本より諸佛と一體なり亦一切衆生を諸佛菩薩は同體の大悲故に一子の如く見給へりかゝる一切衆生なるを迷へる凡夫の淺きしさは好き肴よとて肉を割き骨を碎きて飲み食ふて大に悅ふ有樣を佛の眼より見給へは宛然鬼に異ならす我か子の首を切り肉を割て目に視て怡ひ鼻にかき口に味ひて却て之を怡ひとす是を顚倒の凡夫と云ふかゝる所業を樂と思へるは誠は樂にはあらす是大ひなる苦しみなり此の如きの苦と樂との二つの間に迷ふをは第二の受蘊と名けたり

三界流浪の凡夫の習ひは總へて此苦樂の間を遁るゝ事能わす其故は咲く花を見て樂しみと思へは散るは亦苦なり出つる月を見て樂しめは入る山の端は亦悲し逢ふ事を悦へは別れは却て愁ひなり榮へたるを樂しむ人は衰る時亦苦しむ貧しき人は無きを苦しみ富める人は有るに誤まる詔ふも苦なれは奢るも現には苦しき業戀しきも苦なれは恨しきも亦苦なり大ひなる哉苦樂の二受三界一切の衆生其中に溺れて遂に出るを能はす生つるを生苦と名け年よるを老苦と云病は病苦にして死するは死苦なり男子も苦あれは女人にも苦多し農人も苦なれは諸職も是苦なり奉公も苦なれは浪人は猶苦なり臣下も苦なれは君王も免かれ難し在家而已苦しきに非す出家も亦苦し其中に少し苦の輕して休るを迷て樂と思へるなり譬へは重き荷物を

擔へる人の卸して樂しと思ふが如し亦強く煩ひし人の癒へて樂しと云が如し別に樂と云ふ可きことは無けれとも苦のやすまりたるを樂と思へり亦酒を飲み肴を食ひ婬欲なとに耽りて是を樂と思へるは喩へは痒き瘡を煩ふ人の火にて炙り湯にて洗ひて是を樂と思ふか如し痒きは痛きより增しなれとも痒きも誠には苦しみなり炙るか洗ふかして是を樂と思へるは苦を樂と思へるなり實とは瘡をかゝぬ人の炙りて快きと思ふ逆まの樂しみは曾つて無きこそ實には樂なりけれ此ことわりを能悟りて苦樂の二つを越ぬれは第二の受蘊の迷ひを離れて涅槃の大樂に至るなり

第三に想と云ふは思想とて人々の心中に日々夜々に起る妄想なり晝は妄想となり夜は夢と成る皆人夜の夢はかり實なき僞

りの物にて畫思ふとは皆實なりと思へるなり是大ひなる錯な
り迷へる人の思ふとは畫思ふとも夢に同くして總て跡なき妄
想なるを知らずして實と思へるなり妄想と云ふは妄は虚妄と
て實には其體なき物にて有るに似たり物を妄と云ふ譬へは影
法師の形に似夢の現に似たるか如し總て皆無き物なれども夢
の中には有るに似たり影法師は無き物なれとも月日や亦は燈
の光りに向へは頓て形に影出來て形行けは影も行形ち停れは
影も止る鏡や水に移る影も其如し本より極めてなき物にて慥
に有るに似たるなり人の妄想も其如く誠は都べて無き物なれ
ども思ひ出せる其時は慥に有るに似たるなり憎しと思ひ可愛
しと思ひ恨めしきも嫉ましきも戀しきもふかしきも皆悉く妄
想にて夢見る心に易るとなし我が本心の中にはかゝる樣々の

妄想の素より絶へて無きとは鏡の清か如く水の澄めるに似た
り此本心を悟らさる故に其本心の上に移る妄想の影を認めて
實と思ひて是を堅く執着する故其妄想彌盛んになりて迷ひ益
深きなり惡しと思ふもかはゆしと思ふも皆自から思ひ成しな
り此思ひ成しの處を妄想と名つけたり惡きも可愛きも思ひ成
しと言ふ其謂は唯今惡し可愛しと懷ふ人も未た知る人にも成
らさるさきには惡くもなく可愛くも無し初めて近ずきになり
ぬれとも假染の知る人にして未た親まぬ其間は尙未た其品な
し次第次第に馴れ親しめは我か心に契へる人には親しみの心
深くして可愛き心出來るなり事にこそよれ科にこそよれ若し
愛執の道なとなれは我か命にも替えぬ計にいとほしさの增さ
るもありかやうに鍾愛き心に成ぬれは鍾愛きか必定にて何と

思ひ旋らせとも鍾愛きに究りて假令百千萬刧を經るとも此心は易るまじきかと思へは左はなくして其親しき中なれとも何事そ心に違ふとありて爭ひをなし諠譁口論に及ふか或は愛執の道なとにて餘所に心の移りなとすれは始め最愛かりし心の深き程今の惡くみも亦深し其恨み惡くみの深き餘りには遂には身命を喪なわんと思ふ迄に恨みも惡みも深きなりかゝる道理を以て推し量れは最愛かりしも妄想にして夢の如くの僞りなる故に惡しと思ふも亦妄想なり最愛と思ふ心虛誕にあらすは、姑くの間に引替へて惡くしとは思わし惡くしと思ふか實ならは始めに最愛と憶はし最愛しきも惡くきも實に妄想なる故に其の心定め無く夢の如くに移り易るなり斯る妄想の夢に妖されて胸を焦し身を惱ましし强きは命を失ふは淺ましき迷ひな

り最愛きも惡も此の如く妄想なれは惜しきも欲きも妄想なり或はうらみ或は嫉或は怡ひ或は悲しむ何れか妄想にあらさるや此の妄想の夢に迷ひて高も賤しきも物を知れるも知らさるも老若も男女も地獄の種を造らぬは無し此の妄想を夢そと知さる故に無始久遠の昔より今生今日に至る迄其輪回絶すして地獄に落ち餓鬼となり畜生に生れ修羅となるされは佛になるも地獄に落るも其源を尋ぬれは此妄想の有と無となり能々眼を付て此妄想の禍をなすとを知り亦妄想の夢の如くにして全体無き物なるとを諦らむへし世上の愚者盜みをして王法の誡めに逢ひ今生にては耻を晒らし來生は永く地獄に落るも物を貪る一念の妄想なり亦人謀叛なとを工みて天下國家を顚さんと謀つて其身も深き罪に入り妻子兄弟眷屬迄に堪へ難き苦し

みを見するも唯一念の妄想なりかゝる謀叛なとを工まんと思ひ出す最初の一念は萇菪の煙なとの如くにして極めて幽かなる唯一念の妄想なり此一念の妄想を禍の本そと知らすして混と思ひ重ぬる故に果は一天に充つる雲の如くにして彌思ひ休め難し其最初の一念の時やれ妄想よと諦め知りて胸の中に消んとは何より以て安きとなり合抱の木は毫萌より始るとて五抱へも十抱へもまわる程の大木なれとも其樹の生へ出る最初は針のさきの如くなる少しはかりの兆しなり其萌の出る時は指を以て輕く拔き棄るも安きなり若し大木となれる時は假令千人萬人の力にても容易に拔き難し妄想も亦此れに似たり最初の一念の時早く思ひ捨つへし亦妄想の禍を成すも其如く混と思ひ重ねて大ひに國家の怨とも成る時は其煩ひ大ひなる故

に大木の如しと雖ども大木の如き形ありて除き難き物には非す假令思ひ重ねたる妄想なりとも晴らさんと思ひて思ひ棄る時は日の出て〻闇の晴るか如く更に造作は無き物なり是を千年の闇室に燭を擧すに喩へたり闇久しとて燈を擧す時は晴かたき物にはあらす妄想も其如く一念心を飜せは無始久遠の妄想も刹那か間に晴る〻なり此理を辨へて夢の妄想を思ひ棄て悟の心に本つくべし此妄念を捨すして只管思重ぬれは來生の事はさて置て今生にて鬼となり蛇と爲るを例多し女は取分け罪の深きと言ふは妄想の心を思捨かぬる故なり百億の三千大千世界も衆生の妄想より起り一百三十六の地獄も人々の妄想より作り出せり我と妄想の火をれこして百千萬刧其火に身を焦すは淺間しき凡夫の有樣なり此妄想を思ひ棄て〻第三の想

蘊を越へて悟りの田地に至るべし

第四に行と云ふは行は遷流を義とすとて我か心の生滅して移り替るを云ふなり心に妄想の思ひあれは其心殺那も停るを無くして頻りに遷り替るなり喩へは水の流れて暫くも止まらさるか如く灯の刹那刹那に消へて瞬の間も停らさるに似たり人々の朝より夕に至る迄兎や角やと思ひ續けて移り易る處を意を付て能く見るへしさなから電光石火の如く刹那刹那に移り易りて止るを更らになし一切有爲の迷ひの法は皆是行蘊の遷流なれは無常にして念々に遷り生滅時々に冒して暫くも停らす直饒あらき生滅の心は愚かなる凡夫の心にも知らるれども微細の生滅の念々に遷替るをば凡夫二乘の眼には見へす其心に此の如く生滅ある故に心より生する諸法なれは萬法も亦遷

るを見る圓覺經に雲早けれは月運ひ船行けは岸移るを說き給ふは此意なり雲の行くを早けれは月の移り運ふか如く舟の行くを速なれは岸も山も遷るに似たり是山の移り動くには非す我か乘たる船の行く故なり我か心の雲早き故に眞如の月運ふと見る諸法は本より實相にして常に自ら寂滅の相なれとも三世移り易ると視四時止らさる科を見るは皆な行蘊の迷ひなり涅槃經に諸行無常是生滅法と說き給へるは此事なり諸行とは即ち行蘊なり行蘊の生滅遷流する故に一切萬法遷り易りて刹那も停ることなきを謂ふ此諸行の有爲生滅の迷ひ悉く滅し終らされは寂滅無爲の涅槃の大樂顯はれす諸行の生滅々し終る時寂滅の法現前して萬法一如諸法實相の涅槃の妙樂現前するを生滅々已寂滅爲樂と說き給えり此の如く我身我心も又一切

萬法も常住法身の體にして本より生滅は無き物なるを此行蘊の迷ひ故に眞如の體を見付すして三界生滅の萬法と思へり行蘊の迷ひを越ぬれば先つ我が心常住にして遷り易ることなし我が心遷り易ることなければ諸法も亦常住なりされば我が本心の遷り易らざることは設令ば鏡の本體に似たり明かなる鏡の中に絡白影の移るを見れば天を移し地を移し花を移し柳を移し人間を移し鳥獸を移し樣々の色替り科異なりて刹那も停らざるに似たれども其鏡の本體は鳥獸にも非ず人間にも非ず柳にも非ず花にも非ず地にも非ず天にも非ず只明々として曇りなき鏡の全體なり我が本心の萬法を移し照して其萬法の差別にも預らず生滅にも曾て移らざるを鏡の譬にて知りぬべし迷へる人は心中に移る影のみを見て本心の鏡を見るを能は

ず圓覺經の中に六塵の緣影を自心の相とすと說き給ふは此事なり偖亦鏡に移る諸の影は全體虛妄にして無き物なれば其影を拂ひ捨てゝ始て鏡を見んと思ふは亦究めて愚人の有樣なり花や柳の影は移らば移しながら去來もなく色香も無き明鏡の全體を能く見るべし是を法身と名け眞如と云ふ眞は言く眞實にして僞妄に非ざる事を顯はす如ば言く如常にして變易なきことを表すと唯識論に言へるは此眞如の體妙なり又金剛經には如來と云ふは來る處なく亦去る處なしと說き給ふも此法身如來のことを宣られたり我が本心已に其の如くなれば萬法も亦其の如し萬法を天地森羅萬象と見るは是れ移れる影なり萬法の全體は是明鏡なり影に迷ふを凡夫と云ひ鏡を見るを聖人と云ふ譬を取りてこれを言はば金にて樣々の物の形を作りた

るが如し其形より此を視れば鬼は怖しく佛は尊く老たるは形皺みわかきは顏美はし鶴は脛長く鳧は脚短し松は直く棘は曲れり柳はたをやかに花は艶やかなり金の方より是を視れば鬼も金佛も金男女の差別も君臣の高下も無く鶴の脛の長きも金なれば鳧の脛の短も金なり花も柳も松も棘も只一體の金にして露計も差別は立て難し萬法も亦其如し眞如の方より是を視れば只黃金の如くにして毛頭も差別なし萬法の方より是を視れは樣々の形分れたり衆生は其形に迷ふ諸佛は其眞如を悟る眞如の體の黃金を悟れは樣々の差別の形は有るに任せて只平等にして一味なり嫌ふべき鬼もなく尊ぶべき佛もなく親しむべきも無き故に踈んずべき人も更に無し何にをか嫌ひ何をか好み誰をか謗り誰をか讃めん恨も無く嫉みもなし一切諸の煩

惱は斷するを無けれとも自ら絶へて更になし喩へば日の出たる時闇を除かんとはせざれども其闇自ら無きか如し煩惱を除き迷ひを去らんとはせざれども唯一の實相にして迷ひは自ら不可得なり昔二祖此を得て安心し六祖是を悟りて衣を傳ふ金剛經には三世不可得と說き法華には諸法實相と云ふ是表裡の言なり三世不可得なる故に諸法實相なり諸法實相なる故に三世不可得なり妙なる哉如來の金言心を停めて見るべきなり亦本心の生滅去來を離て常住なる處を能く悟りぬれは心中に移る影も亦常住不滅なり其故如何と言へば森羅萬象の差別古往今來の生滅の影は本より虛妄なる故に來る事なく亦去る事なく生ずるをなく滅するをなし已に生滅去來なき時は諸の差別も亦有るをなし鏡の影を以て其理はりを心得べし影の始めて

移るを視る時其影鏡の中に入來るに非ず初め已に入り來らざる影なれば今亦出で去るべき理はりなし影は本より出入去來無き故に鏡は本より鏡計りにして遂に影に成たる事なし影に成らずして影を移す鏡なれは森羅萬象歴然として絶るなし是移すとも言ひ難く亦移さゝるとも言ひ難し金にて作る色々の形の鬼にも非す佛にもあらすして亦鬼の形ともなり佛の形とも成るか如し有るとも言ひ難く無しとも言ひ難し是を如幻の萬法と云ふ幻とは術道にて諸の生物なとを作り出すを言ふ、術道にて作り出せる生物なれは有るとも言ひ難く無しとも言ひ難し無き物と言んとすれは眼前に鳥獸と成りて飛ひ走る有る物と言んとすれは實の鳥獸には非す或は木の切れ手巾なとを術道にて生物となしたるなり今此三界の天地萬法並に人々

の身に至る迄其の如し一心の本體より是を視れは實に本來無一物にして一塵をも立せさる實際の理地なる故諸佛も無く衆生もなく古も無く今も無く天に非す地に非す自に非す他に非す法界平等一相なり金にて作れる物を金の方より視るか如し是を心眞如門と言ふ萬法の方より是を見れは天地日月位を分ち森羅萬象科異なりて花は常に紅柳はいつも緑火は熱く水は冷かに風は動き山は靜かに松は直く棘は曲れり鶴は白く烏は黑く天は高く地は低く佛あり衆生あり我と云ひ人と云ひ春夏秋冬の折々青黄赤白の色々一つとして亂るゝことなし金を見すして樣々の姿より見るか如し是を心生滅門と云ふ一切諸の衆生は此萬法の諸相に迷ひて目に見ては貪り耳に聞ては爭ひ鼻に齅き舌に味ひ身に觸て其物毎に貪着して更に此萬法の夢

幻泡影の如く、鏡像水月の如くにして幻化虚妄なることを知らす胎卵湿化の四生を受け生住異滅の四相に移され五欲の境界に着して六根の罪業を造り千生萬劫地獄餓鬼の餓に身を焦し生生世世畜生修羅の苦みに沈み或は人間に生すれとも四大和合の色身を我と思ゐ六塵虚妄の緑影を心として生老病死念念に侵し春夏秋冬時々に移り緑の髪忽ち白く花の顔遂に委みて朝の露と消へ夕の烟と上る斯る無常轉變の浮世電光石火の我か身暫くも停ることと能はす刹那も静なること無くして水の時々に流るゝか如く灯の念々消ぬるに似たり是をさしく行蘊の姿なり然るに衆生の三界に流轉するは萬法の幻化を知らすして其夢幻の六塵に貪着して十悪五逆の幻業を造る故に地獄餓鬼の幻果を受く我か身本より幻なれは其心も亦幻なり其心既

に幻なれは其煩悩も亦幻なり煩悩本より幻なる故に其の悪業も亦幻なり悪業悉く幻なれは三塗の苦果も是幻なり三塗既に幻なれは四生の因果も悉く幻にして一大法界の其中に幻に非らさるもの有ることなし衆生幻業を造りて幻苦を受く故に諸佛幻慈を垂れて幻法を説き幻苦を救ふて幻樂を與ふ是を涅槃の大樂と云ふ此大樂を受ることは其幻法を知る故なり衆生は幻法に迷ふ故に幻業によりて幻苦を受く諸佛は幻法を悟る故に幻苦を脱して幻樂となす幻法に迷ふ衆生は夢幻の生滅に妖されて生死無常の行苦を受けて行蘊の遷流となす幻法を悟る諸佛は夢幻の生死を涅槃となして行苦を滅して常樂に昇る如何して生滅の行苦を以て涅槃の常樂と成すとならは是別に造作に預るにあらす唯萬法の遷流生死の法を徹底夢幻と知れは

なり此のゆへに圓覺經に云く幻と知れは即ち離る方便を成さす幻を離れは即ち覺なり亦漸次なしと其故如何となれは三界萬法既に幻なるゆへに幻は本より生することなし既に生せぬ萬法なれは何れのときか滅することあらん已に生滅去來に預からす豈に不生不滅の涅槃にあらすや既に不生不滅の體なれは何んそ是非得失の沙汰かあらんもとより生死無き故に涅槃と云ふも假の名なり生死にも涅槃にも預らされは煩惱菩提の分ちもなく衆生諸佛の隔ても無し生死の煩ひは煩惱なり煩惱無き故に菩提も無し煩惱もなく生死も無れは何をか衆生と名く可き衆生悟りたるを諸佛と云ふ素より衆生に非か故に今悟りて佛諸と云ふへきもなしされは悟りと云ふをは此の如く人々素より迷はすして唯本との姿なるをを慥に視付るを言ふ

なり圓經覺に始て知る衆生本來成佛と說れたる此意なり本來成佛とは本より佛と言ふ意なり素より衆生に非るか故に佛と言ふ可き樣も無けれとも本より迷ひの衆生にあらさることを強て佛と名けたり譬へは夢見る人に向て汝か見る處の物は一切皆實の物には非す天地と見るも實の天地に非す草木國土と視るも誠の草木國土に非す我と見人と視苦と思ひ樂と憶ふ皆眞の事に非すと言はん時彼の夢見る人恐くは是を聞て扨は天地も無く草木國土もなく我も人も無く空なる處を覺めたる眞との處と言はんかと意ふならん今其れにも非す此にも非すと言ふは夢の中に視をは總て跡無く忘想にて眞實の物には非す夢の心には實との物そと憶て其物に取り付きて苦と思ひ樂と思ふ故に其夢を覺して覺たる時の眞實の天地世界を知らしめ

ん爲なり今迷へる人に向ひて生死涅槃に非衆生諸佛に非と言へは扨一向斷無にして空なる處を實との悟りと云ふかと思へるは夢見る人の我か見る處總て眞實にあらすと言はゝ天地世界空にして都へてなき處を眞實の覺めたる境界かと言かと云に似たり悟りて迷ひの夢礙と一と度覺されは其悟りの有樣を慥に知ること能はす法華經の中に如是相如是性如是體如是力如是作如是因如是緣如是果如是報如是本末究竟等と說き給るは迷の夢の覺たる時の姿なり是を法は法位に住して世間の相常住と云亦衆生見刼盡大火所燒時我此土安穩天人常充滿と云り此意は迷の衆生の眼には刼末になりて此世界の壞るゝ時無間地獄より火起て初禪天迄燒亡すと視る時釋迦如來の御眼よりは此世界安穩にして天人も人間も充滿して園林諸の堂閣種

々の寶の莊嚴ありて寶樹には華果多く衆生其中に遊樂す諸天天鼓を擊ちて常に諸の伎樂をなし曼陀羅華を雨して佛及大衆に散し其外無量の樂有と視玉ふ同し一つの水なれとも餓鬼の眼には火と見に人は本の如く水と見る迷されは三界の火宅には非すして淸淨の淨土なれとも迷を三界六道と見る餓鬼の水を火と見るか如し問て云く我身も素より佛にして世界も昔より淨土ならんと疑なし然とも有爲の世界の移り易るを見我身も生老病死に預る時は生滅行苦未た離さるに似たり如何して か此行苦を離れて不生不滅に至るべきや答て云く左樣の心得は信解とて分別にて推し量て少し悟の有樣を心得たるに似たれとも未た眞との悟り開けぬ故に無明の夢覺めず然る故に其理を荒增しは知りなから夢幻の我か身に於て我執我慢も離れ

す憎愛是非も猶深し夢幻の境界に迷ひて動もすれは得失利害の意を起して三塗の業を作る皆夢中の姿なり圓覺經に未出輪廻而辨圓覺彼圓覺性即同流轉いへり此意は未た其心悟らすして其分別の心を以て彼悟りの圓覺の體を辨別し思量すれは彼圓覺も亦輪廻となると云ふ意なり眞實に悟りの體に適んと懷はゝ一切の智解情識を捨てゝ是非邪正に心を止めす銀山鐵壁に指向ふか如くにして眞實堅固の志を起し一則の話頭を提撕して前後左右を顧みす寐食寒暑を忘れて疑來疑去らは時節因緣到來して忽然として曠劫以來の無明の漆桶を打破せん時始めて長夜の夢覺めて掌を打て呵々大笑して本來の面目を現し本地の風光を明らめ千生萬劫の本意を遂へし唯眞實の心を起さすんは此無明を破り難し昔長水尊者楞嚴の清淨本然云何忽

生山河大地の文を疑て瑯琊の惠覺和尚に問て云く如何是清淨本然云何忽生山河大地と長水言下に於て桶底の脫するか如くこつねんとして大悟せり是正しく此行蘊を越へられし姿也楞嚴の文の心は此世界は素より清淨本然の淨土なりと楞嚴會上に於て世尊說き給ひし時當樓那尊者問て云く如來宣ふ如く此世界清淨本然の淨土ならは如何そたちまちに山河大地諸の有爲の相を生して此くの如く遷流生滅する哉と云ふ意なり長水其前は行蘊の夢覺めさる故に此文に深く疑ひあり然る故に是を擧けて問ひ給へは瑯琊和尚の答によりて始て彼夢を覺して清淨本然の處を視られしなり昔し僧あり古德に問て云く起滅して不停時如何古德答て云く直須寒灰枯木去亦自餘の古德にとふて云起滅

して不停時如何古德答て云く瞎漢何處是起滅すと僧言下に於て大悟すと言へり是皆行蘊を越へて本分の田地に至れる人の有様なり

第五に識と云ふは是即色受想行の四のもとゝなりて三界六道を生して人々の身より森羅萬象天地虛空迄を生する迷ひの根本なり此識は全體本心にて體には差別なしと雖とも無明の煩ひ有る故に識と云ふ若し無明の煩ひなければ即ち本心なり識は夢幻の如く唯是一心と圭峯も言はれたり識と云ふ時は幻とて術道をする者の木の切れなとを取りて色々の鳥獸と成すか如し正しく生物となりて飛走ると雖とも木の切は素より木の切れにて鳥獸とはならす成らすして成る様に視する是術道の力なり識も其の如く本心を無明の術道の力にて科かはる様に

視すれとも本心の體は替らす亦喩へは識は人の睡りたるか如し睡らされは夢を視るをなし睡るか故に様々の夢を見て色々の無きをを有る様に見するなり識も亦此の如く本來の本心にて無明の睡りのなき時は三界の差別もなく六道の科もなく地獄も無く天堂も無く娑婆と云ふともなき故に何に對してか極樂とも言はん生死素より無き故に涅槃と云ふ名も付け難し煩惱初めより起らされは菩提を求むへきをも無し本より衆生とならされは佛と成へき様もなし遂に迷はぬ心なれは何をか今更悟るべき一切皆此の如くにして言ふに云はれぬ目出度本心の體なり此處を强て名付けて本分の田地と云ひ本來の面目と云ふ此本來の面目に無明の睡着きたる處を根本無明と云ふ是迷ひの初なり此の根本無明の眠着きし故にさま〳〵の夢を見

る先つ虚空有りと見る是即ち夢の始也楞嚴經に晦昧空を成すとも云ひ迷妄に虚空有りとも言へるは是なり虚空ありと見る故に虚空の中に天地あり天地の中に萬物あり萬物の中に人間あり人間の中に我あり人あり、鳥類あり畜類あり月あり花ありと見るよりして悪くき者あり可愛き者あり戀しき者あり好しき者あり好ましからざる者有り是よりして欲しき物あり惜しき物有て八萬四千の有らゆる煩悩の夢を見出して此煩悩により て殺生を爲し盗みをし婬欲を犯し妄語を言ひ其外在らゆる身に成す悪業は彼の煩悩に狂はされて作出す悪業也此の諸の悪業を作れは地獄か餓鬼か畜生か三つの悪道に落ちて無量億劫の間熾なる焔に身を焦され紅蓮大紅蓮の氷に骨をこちられ或は餓鬼道の絶へ難き苦しみに身を沈めて百萬劫飲食の名をた

にも聞かす水に逢ふて飲んとすれは水忽ち火と成りて喉を燒か如く苦しみを受るも皆悉く無明の睡の内の夢の有様なり若し又人有て其悪業を翻へして五戒十善を持ては三悪道を遁れて人間天上の生を受けて來生目出度身と生れ其善業の高下によりて夫々の樂しみを受く然と雖も是皆三界の中にして無明の睡の夢の中の事なれは樂と云ふも眞の樂には非す根本は苦なれども迷ひて樂と思へるなり増して人間にも八苦あり天上にも五衰ありて其苦しみ絶せねは意を停むへき所に非す速に厭ひ棄つへき若し又人ありて此理を諦らめて人間天上の樂しみは樂しみには似たれとも六道輪廻の中にして有爲無常の樂なれは是亦無明の夢の中の虚なる樂ぞと心得て大眞實の信を起して坐禪工夫成す時其心の中に善悪無記の三性の科起る善

と云ふは好き事を思ふ心悪と云ふは悪念の浮ふを言ふ無記と云ふは善にも非す悪にも非す茫然として虚々したる心なり此三科の念起りて止むをなし或は悪事を思はされは善事を思ふ善事を思はされは悪事を思ふ若し少しの間なと善念も悪念も起らされは無記とて何とも無き茫然としたる心にて虚々して有るものなり其悪念は地獄餓鬼畜生の種善念は人間天上の種無記は未た善悪の分ちのなき愚痴無明の姿なり箇様に善悪無記の内を離れさる間は未た坐禪の熟せさる初心の人の有様なりかゝる念の起るにも搆はす彌志を深くして退屈の心なく只管坐禪する時は坐禪の心ちと熟して時として善念も起らす悪念も亦起らす虚々したる無記の心にてもなくして其心澄み渉りて磨立てたる鏡の如く澄み渡りたる水の如くなる心少しの

間生するをあり是れは坐禪の心持露程顕はれたる驗しなり箇様の時は彌進みて坐禪すへし只管怠たらす坐禪すれは始めは暫くの間澄める心に成りたるか漸々に其心澄み渉りて坐禪の中三分か一澄む事もあり或は始終澄み渉りて善悪の念も起らす無記の心にも非す晴れたる秋の空の如く磨きたる鏡を臺に載せたるか如く心虚空に齊しくして法界胸の中に在るか如く覺にて其胸の中の涼しきを譬へて云ふべき様もなく覺ゆるをあり是は早や坐禪の過半成就せる姿なり是を吾か宗にては打成一片と言ひ亦は一色邊と言ひ大死底の人とも言ひ普賢の境界とも言ふ箇様の事暫もあれは初心の人は早や悟りて釋迦達磨にも等しきかと思へり是大ひなる誤りなり此の如くなりたる時を此の第五の識蘊と云ふ楞嚴經に湛入合湛は識の邊際な

りと說き給ふは此事なり世上に强く坐禪する人ありて箇樣の處を視付ては早や悟りそと心得て臨濟德山をも欺き我れ本來の面目を得たり本分の田地に至れりと詈しり人にも多く印可し棒を行し喝を下し祖師の行迹をなす是未た佛祖の內證を知らす一心の根源に至らさる人なり未た此處迄至らすして諸々の道理を心得て悟りと思ひ或は一切空なる處を悟りと言ひ或は目口を動かし手足を働かす者なとを悟りそと人にも許す人あり此皆遙に佛祖の心に隔りたる人なり今此識に迷ひて悟りと思へる人は左樣の淺き心得の人には大ひに替れり眞實もある故に此處迄は修行し昇るとは雖とも此識を越るとを知らすして識に迷ひて本心とす未た修行の至らさる處ある故なり楞嚴經に曰く如此分別總て無き時非色非空拘舍離等か晦まして

冥諦とするも諸の法緣を離れては分別の性なしと亦言く假令見聞覺知を滅て內に幽間を護るも猶是法塵分別の影事なりと云へり古德釋して此中に幽間を守る處若干の賢聖を埋沒し畢る宋儒の喜怒愛樂の未た發せさるの氣象を視るに唯此內に有り老子の虛極を致し靜篤を衛るも亦只此內に有佛敎の中に阿羅漢辟支佛の入る處の定悟る處の果も亦唯此中に有りと言へり是皆見聞覺知の分別を離れて無念無心なる處を指して佛も祖師も此の如く宣へり無念無心にして晴れたる空の如くなる處は衆生の第八識とて三界六道の迷ひを作り出せる根本なり此處よりして天地虛空其中の有情非情の樣々の科を思ひ出せり睡るか故に樣々の夢を見るか如し三界唯識と佛の說き給ふは此義なり亦第八識は根身種子器界を緣とすと言へるも此事

なり亦楞嚴經に陀那は微細の識なり習氣暴流を成す眞と非眞と迷はんとを怖れて我常に開演せすと說き給へり古德釋して佛若し一向に眞と說き給はゝ衆生進修せすして增上慢に墮せん若し一向に不眞と說き給はゝ衆生自身を撥棄して斷見を生せん此故に凡夫二乘に對しては常には說き給はすと云へり此識實の本心に似て亦本心にては無き故に愚なる者に向ては容易には佛も說給はす其故は此識を即ち眞實そと說き給はゝ衆生其處に止りて最早滿足せりと思ひて進んて修行せす若し眞に非すと說き給はゝ衆生扨は一向空にして本心と云ふとは無きかと懷ひて斷無の見に落ちて眞實に本心を悟ると能はす然るか故に此處大事にて容易には佛も說き給はすと云ふ意なり此識は全体本心なれとも無明の睡り着たる故に即ち本心とは

言ひ難し本心とは言ひ難けれ共亦諸の妄想は早や去てなき處なれは一向の迷ひにても無し若し修行の人此處へ行き着きなは彌精を出して修行すべし稍て實の悟りの顯るゝ前相なり喩へは夜の明けて日の未た出さる時の如し夜の闇は早や晴ぬれとも如何なる子細にて箇樣に闇は晴れて世界皆明らかに成りたると云ふ事を知らす若し此闇の晴たるを視て早や事は成就したりとて指し措かは日輪を視ること能はす若し妄想の闇晴れて胸の中の明らかに澄み渉りたるを視著けて最早悟りたりと思ひて指し置かは般若の日輪は見ること能はす妄想の闇は晴ぬれとも未た此處にては無きそと心得て捨措きもせす亦悅もせす悟りを待つ意もなく唯無念無心にして只管勉め行けは忽然として眞實の悟り顯はれて萬法を照すこと百千の日輪の

一片に出給ふか如し是を見性成佛とも言ひ大悟大徹とも名付け寂滅爲樂とも云へり此時三世の諸佛に一時に對面し釋迦達磨の骨髓を知り一切衆生の本性を見天地萬物の根源に徹す其恰はしきくと喩へて言ふ樣なし此の故に楞嚴の中に淨究りて光通達す寂照に虛空を含む歸り來て世間を視れは猶夢中の事の如しと云へり此悟りひらけぬれは大地虛空悉く法性法身の寂照不二の體にして森羅萬象一物として我か本心にあらさる物なし是故に楞嚴には見も見緣も現前の境に似たれとも本より我か覺明なりと言へり見とは我か六根の中の眼一つを擧けて餘の五根を知らしむ見緣とは六塵の境界一切萬法なり此我か身も萬法も唯一の本心妙覺明の體なることを說き玉へり是を大地を變して黃金と爲し長河を攪いて酥酪と成すと云ふ是

眞實の極樂世界なり昔僧あり雲門に問て云く不起一念の時如何雲門云く須彌山亦僧有り趙州に問ふ一物不將來の時如何趙州云く放下着僧云く一物既不將來箇の何にをか放下せん趙州曰く放不下ならは擔取し去れと其僧言下に於て大悟す或は不起一念と云ひ一物不將來と云ふ皆彼無念無心の田地に至れる僧なり此處を悟りそと心得て雲門に問ひ趙州に問ふ是病なることを知りて此の如く答られしなり此須彌山放下着を透得せは始めて本分の田地に至り雲門趙州に相見すへし能く〳〵工夫して此田地に至るべし此故に古人言く懸崖に手を撒して自ら肯ふて承當すべし絕後に再ひ蘇息せは君を欺くを得じと言ひ亦百尺竿頭に一步を進め十方世界に全身を現すと云へる皆此悟りの顯はるゝ時の事なり能々工夫して五蘊の區域を超越

し内部の智德を淬煉して悟道の妙境界に至るへし是を人文開明の昌代の人の所業と謂ふ必す内外の分界を誤認して世上の時流に墮し妄情を驅馳すること勿れ

上來縷々せし處は吾か勸善會社諸氏をして先經義に據て内部を詳明にし暗證考流の患なからしめんか爲にことさらに草裡に輒して懇說するものなり余か婆心を嘲けることなれ五蘊皆空の妙義に至ては我宗最後向上の一着にして指南の旨は言詮筆語の及ふ處にあらす若し此田地に到らんと欲せは差別難透の話頭に於て百錬千鍛せよ設令通過の分あるも尙打返し打返し審細に參究すべし必定是此の向上の大事に出格些子の妙處あることを知らん然りと雖どもそは明師に就て親く爐鞴に入らすんは其深奥を盡すこと能はす唯恐くは眞正の宗師こゝに

堪たる者は天上に日を擇ぶか如く難ふして又難し若し人あり是に於て精彩を盡して通得分明ならは法に於て大自在を得て佛魔の兩界に遊戯し粘を解き縛を去り釘を抽楔を拔て洒々落々の田地に到らん是を自性研究淬勵の極度と云ふ伏て乞大心の佛子等直心志願實悟の三得鼎足の如くにして眞正菩薩の大行を修煉せよ己が一旦の小見に誇て萬刧の大事を失することなかれ囑々今此論の筆を閣くに臨みて鄙歌一首を口づさみぬ

なかなかに根ふかきものは蓮すはなの
濁りにしをぬ美ほとけの道

勸善餘論卷下終り

明治三十六年三月十八日印刷
同　年三月廿一日發行

非賣品

編輯兼發行者　東京市日本橋區若松町二十二番地住　川尻義祐

發行所　神奈川縣鎌倉山之内村住　釋宗演

印刷者　神奈川縣鎌倉山之内村住　大瀧惠音

印刷所　東京市淺草區黑舟町廿八番地　東京並木活版所

81
496

87
796